
劇場版ケロロ軍曹 反ケロン軍来襲！～今明かされる闇の歴史～

慧螺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

劇場版ケロロ軍曹 反ケロン軍来襲！〜今明かされる闇の歴史〜

【Nコード】

N3240S

【作者名】

慧螺

【あらすじ】

何かが落ちる音がした・・・それがすべてを始まりを告げる音だとは誰も知らなかった。

ギロロ総受け気味です

プロローグ（前書き）

何かが落ちる音・・・それがすべての始まりの音だった・・・

ブログ

えゝ・絵 (http://www.pixiv.net/member/illustrist.php?mode=medium&illustrist_id=17735185) の本編です;; できればかんけつできるようなります。

かなり、捏造設定です。出演者はケロロ小隊・ガルル小隊・日向家（秋除）です。ケロロとギロロの出会いなんかも書きちゃってます; or z

絵は超下手糞などで、たまに簡単に挿絵が入ってくるかもしれませんが、そんな時は生暖かい目で見守ってください。

行方不明と奇襲（前書き）

あゝ・・・初めてしまったヨ・・・;;

行方不明と奇襲

「隊長ー」

「んー？どうしたでありますかー？」

地球を侵略しにきたはずなのに、すっかり地球に馴染んでいるカエル型宇宙人のケロロ軍曹。その部下四人は奥東京市の日向家に居候していた。

基地の出入り口の冷蔵庫から出てきたのはケロロ小队参謀のクル曹長

「先輩、しらね？昨日からいねえぜえ？」

「ああ。ケロン星でありますよ、一昨日の夜に向かったであります・
・まだ、帰ってないでありますか？」

「帰ってきてねえから聞いてんだよ」

クルルの意見はもっともだったのでケロロはガンブラ作っている手を止め、クルルに向き合う

「まあ、今日の昼ごろには帰ってくる」

「いいかけたその時、警報が鳴った。」

「ゲロッ？なんでありますか？」

『おじさまー！ペコポン上空にケロン軍艦の反応有です！てゆーか、突然訪問？』

「識別コードは？」

『え・・と、ガルル小队です！まっすぐ、日向家の庭に來ます！』

モアの言ったとおり庭に出る途中でドスンと音がした。

「ボケガエルー！」

「はいはい！只今っ！」

夏美の声にケロロが反応する。ケロロ達が庭に出ると、ガルル小队の小型艦があった

艦の中からガルル達が出てきて手当てが始まった。だが、ゾルル兵長がいなかった。

「反ケロン軍がケロン軍を攻めてきた？」

「はい。いきなり本部を奇襲されました」

「んで、オイラ達が大佐の命令でペコポンに行ってこいって言われたッス・・・」

「ペコポンに？何故・・・」

「おそらく、ペコポンが狙われたんだと思います・・・ギロロはどちらに？」

一通り説明した後、ガルルは確認をするように聞く。その声音は焦っているようにも聞こえる。

「ゲロ？ケロン星で合流してないんで？」

てつきり、ケロロは話を聞きながらギロロも加勢してるんだよねーと思っていた。

「いえ・・・ギロロは見かけていませんが、ケロン星に帰っているのですか？」

「一昨日から帰ってるのですが・・・」

ケロロはクルルに向かって、ギロロと連絡を取るよう指示を出したが・・・

「出ねえし、先輩の居場所が特定できねえどうなってやがる・・・」

クルルがそういうと、タルルは不安そうにガルルを見て

「隊長・・・あの影って・・・」

「あの影？」

「・・・ケロロ軍曹殿、私達は幻覚か見間違いだと思っていた事実がある。私とタルルしか見ていないので余計なんだが・・・」

「なんでありますか？」

「反ケロン軍側にギロロがいたんだ・・・遠かったが間違いなかった、他の反ケロン軍兵士を仕切っていた・・・」

ガルルの言葉にケロロ小隊と夏美たちは固まった。パソコンを優雅に叩いていたクルルも思わず手を止めた

「ギ・・・ロロ・・・が？」

「・・・はい。」

「なっあの堅物の先輩がケロン軍を裏切る行為をするはずねえだろ・・！」

「そ、そうよ！ギロロはそんなことをする奴じゃないわ・・・！」
クルルと夏美が反論した。

「そうですよお！伍長さんが・・・！」

「オイラたちもそう思ったたッスよ！でも、ケロン人で体色が赤色
ってそういないじゃないッスカ・・・それで余計に・・・」

ギロロの体色は中々ない体色だった。それうえに戦場の赤い悪魔
とも称されているのだ。

「まあギロロの話は置いといて、いや置いといたらダメであります
が；ゾルル兵長はどうしたんで？」

「ゾルル兵長も行方がつかないんです。戦時中はいたのですが、ペ
コポンに向かうとしたら居なくなっていて・・・」

「指示が届かなかったとか？」

ガルルの言葉に冬樹のが言った。その可能性をガルルは一番最初
に思ったが、大佐は全員に言ったと戦艦の中でいった。

「いえ・・・それはないと・・・」

「こうやって、ネチネチ話し合っても仕方ないでありますっまず怪
我の治療に専念して欲しいでありますよ」

ケロロの言うとおりだったのでガルル小隊は日向家で療養するこ
とになった。

療養し一週間、大分怪我の方も良くなったガルル小隊とケロロ小
隊、日向家の夏美と冬樹にケロロ小隊に縁を持っている地球人が司
令室にいた。

大まかなことは小隊同士で話すが地球に関わると、夏美たちに意
見を求めることもある。今回ばかりはケロン人同士の問題ではない
のだ。

そんな時だった警報が鳴った、警報は侵入者と告げていた。

『ハッキングもかかっている！俺とガキが対処すつから、そっちは任せたぜえ』

『侵入者は二人だヨー』

なんだかんだと言って仲がいい小隊同士で嫌味を言いながら、クルルはトロロを目に掛けていた。共闘するのが嬉しいのだろう。

この基地には侵入者用の罠が張ってある（勿論ギロロ提案ばかり）。廊下の奥から銃撃戦の音をする。奥から怒声もする。

すると、すぐにドアが開いた。居たのは黒っぽい灰色で半目のケロン人だった。

行方不明と奇襲（後書き）

はい、早くも戦闘来た（笑）

裏切りと反ケロン軍（前書き）

コメントありがとうございます W W 絵を拝見したいとおもいますが、
検索しても出てきません；；すみません；；

裏切りと反ケロン軍

「えーと・・・始めましてえ・・・反ケロン軍準幹部小隊突撃兵のタナナ反二等兵と言いますー・・・ああ、ケロロ小隊もガルル小隊もいますねえー」

タナナは自己紹介した後、周りを見渡して、確認した。すると、廊下が吹っ飛んだ

「もおー・・・ロギギー吹っ飛ばすのやめてって言いましたけどー」
「悪い悪い！煩わしくつい・・・」

次に現れたのはゴーグルをかけて、暗紅色のギロロと似たベルトをしているが、バツテンを作るように掛けられている。ゴーグルを外しながら、

「俺の名は反ケロン軍準幹部小隊起動歩兵のロギギだ。今回は挨拶に來ただけだ、別段危害を加えるつもりはねえよ」

その場に居るものはそういつて逃がす者達ではなかった。すぐさまクルルの罠が発動した。

タナナとロギギの上に牢が振ってきて二人を閉じ込めた

「あ。捕まった・・・」

「ドジですねえー」

「るっせえ！テメエも捕まってるだろうが！悪いルクク捕まった」
すると、モニターから水色の体色をしたケロン人が現れた

「クルル!？」

『悪い・・・！モニターの部分持ってかれた』

『キキキツ甘えんだよ。タイチョー馬鹿二人とっ捕まったー』

「誰が馬鹿だ!#」

ケロロ達は焦るがマザーまではやられていなことに安心する。その後よく知った声が響いた

「その二人を解放してもらおうか、大事な仲間だ」

「え・・・」

全員が素っ頓狂な声を上げた。視線の先にはまだロギギがした、後の煙が立ち込めている。その中からケロン人特有の足音がなってきた

「もう、一度言おう。仲間を返してもらおうか・・・」

その影は言うが早いか、二人の牢の一部を破壊した

「サンキュ！隊長！」

「ふん、おめおめ捕まる奴がいるか」

「いや、隊長が助けに来るって知ってましたしねえー」

煙が晴れるとそこには、所々包帯を巻いたギロロがいた。後ろにはフードを被っているケロン人がいた。

「ギロロッ！」

ケロロは思わず叫ぶ、目の前には行方がわからなかった親友がいた
「ギロロ？違う。俺の名はギンロだ。ルクク、挨拶だ。自己紹介はしておけ」

『キキキッ、俺様は反ケロン軍準幹部小隊参謀ルクク反曹長。
まあよろー』

ルククが挨拶した後、ギロローギンロは後ろに居るケロン人と話す

決まったのか、そのケロン人がフードをはがす・・・そこにいたのは、ガルル小隊がよく知る人物だった

「ゾルル・・・兵長・・・？」

ガルルが呟いた同時にそこにはガルル小隊暗殺兵のゾルル兵長がいた

「違・・・う・・・俺の名は、反ケロン軍・・・準幹部小隊・・・暗殺兵・・・ゾルル反兵長・・・だ」

ゾルルは自らの武器のプレート出しながら言う
「なっ・・・」

『ウソだ!』

ガルル達が絶句している中、トロロが叫んだ。ゾルルのメンテナンスは必ずトロロが行っていた。それだけに情もある

『ウソだ・・!ゾルルが反ケロン軍だなんて、ウソだ・・』

「・・・本当ダ・・」

『っ・・・』

ゾルルは無機質に言い放つ、誰もがトロロが傷ついたということがわかった。

「貴様・・いつから騙していたんだ・・!」

「・・軍に入った・・時から・・」

「ゾルルはケロン軍の動向を探らせるために送り込んだスパイということだ」

ガルルの問いにギンロが変わりに答えた。

「ああ・・俺の名は反ケロン軍準幹部小隊隊長・・ギンロ反伍長だ」

「ギロロ・・?冗談でありますよ・・・?反ケロン軍だなんて・・」

「

「ケロロ軍曹。ケロロ小隊隊長ケロンスター所持。ケロボールはペコポン人日向冬樹の手にある・・・か」

「いやはや・・世も末ってやつ?」

「てゆーか、強奪KO?」

ロギギとタナナはギロロに近づいていきギンロを護るように前に立つ。

「俺ノ仲間は・・反ケロン軍のミ・・」

ゾルルが言い放つ

「今回はほんの挨拶だけだ。別に貴様らを今すぐ殺めるつもりはない。ルクク」

『了解♪』

ギンロが言うと、後ろにゲートが現れた

「ギロロ!待つであります!どこ行くんですか!」

「本来あるべき場所にだ」

ケロロの問いにあっさり答えるギンロ。

「ギロロ伍長・軍法会議モノだぞ・・・」

「ふん。なんのことだ？俺は反ケロン軍だ」

「おい、ギンロ。無駄話はいい。さっさと帰って来い」

新たな声がして、モニターを見ると、濃い緑色の体色をし、外側に黒い模様がある羽織を羽織っている半目のケロン人だった

「あ、大将」

『さっさと帰って来い。挨拶だけだろうが』

「わかつとる。貴様もそう簡単に表に出るな、バレるぞ」

『バラすつもりで出てきたからな。始めまして、俺はケルル、反ケロン軍トップのケルルだ』

「ギロロに何をしたでありますかっ!？」

『何もしてねえ。むしろしたのはケロン軍の方だろう?』

ケロロはケルルに詰め寄る。その間にギンロたちはゲートに入る
「っギロロ!」

『ゾルル!』

ケロロとトロロの声が重なった。だが、二人は目もくれず去った。
途端モニターからケルルも消えた

裏切りと反ケロン軍（後書き）

えと、一応わかりやすく言っておきます。ギンローギロロですので
しばらくギロロの表記はギンロになります W W

現実と慰めと（前書き）

本日で二話連続投稿 W
W

現実と慰めと

「・・・どうなってるの・・・？」

呟いたのは夏美だった。誰もが心境は同じだった

『ウソだ・・・！ウソ・・・！』

トロロは作業も忘れて、泣いていた

「と、とりあえず、落ち着くでありますっ」

そういう、ケロロだが、本人が落ち着いていないのが現状でケロロの心境は混乱していた

反ケロン軍本部。そこに今ギンロは居た。他にもロギギとタナナとゾルルもいた。

「いいのか？」

「何がダ・・・？」

「ガルル小队と決別したことを、だ」

「・・・何ヲ、今更・・・」

「今なら間に合うぞ？」

ギンロはしつこく言う。ギンロはゾルルを追い出たくて言っているわけではない。今の段階ならば操られたといえれば許せる時期だ
「俺の・・・居場所ハ・・・ここダ・・・それに、おマエがいないと、意味がない・・・」

「？そうか」

「ギンロー冗談でも言ってるじゃねえぞ。ゾルルは反ケロン軍のアサシントップなんだからよ」

「むっ・・・すまん・・・」

「まあまあ大将そんなこと言ってやるなよ、隊長も悪気があって言うてるんじゃないさ」

「わーってるよ、んなことは。だがな、ギンロ。ゾルルは元々ここに所属しているんだ、今更だろ？」

「まあ・・・そうなのだがな・・・；」

ギンロはそういわれるとぐうの音も出なかった。

「たいちよーロギギー新しい銃、手に入ったぜえー」

「「何!？」」

「武器マニアめ・・・；」

ルククの言葉にギンロとロギギが反応する。同じ起動歩兵で銃好きの二人にはルククの言葉はケロン軍襲撃のことを忘れるぐらい楽しみなのだ。それを呆れた顔でケルルが見ていた。ゾルルも呆れておりタナナは

「仲いいですねー」

と言っていた。

ギロロたちが去った後、緊急会議が開かれた。

「ギロロとゾルル兵長が裏切った・・・この事実は変わらないであります・・・」

「ええ・・・ゾルルも今回の襲撃に紛れて戻ってくるよう指示をされていたんだと思います・・・」

「ゾルル・・・」

「トロロ・・・」

タルルはトロロの頭を撫でていた。

「我輩としては、ギロロの様子が変だったであります・・・」

「だなあ本当に俺達がわからねえって顔してたし・・・」

「ギロロくんの目に迷いはなかったでござるな・・・」

「ギロロはまだよくわかりませんね・・・だが、ゾルル兵長は確実にすね・・・」

「ちよ、待ってヨ! 操られてるって可能性もあるジャン!」

「でも、ゾルル兵長はそう簡単に洗脳されないし、洗脳については宇宙警法でできてますし・・・可能性は低いツスよ?」

半泣き状態のトロロの言葉にタルルが言う。流石に犯罪に手を染めてまで洗脳をする必要がないだろう。

「・・・っバカー！！！」

「Σトロロ!？」

トロロはそう怒鳴ると、トロロは出て行ってしまった

「しょうがないでありますよ・・・まだ、裏切りを知らないから・・・」

」

「だが、今単独行動させるのは危険ですっ」

「オイラが行って来るッス！」

そういうとタルルは行ってしまった

「あー・・・面倒だよなあ・・・」

ルククはびこぴこと歩いていた頭の上には買い物袋が置いてあった。その前にはトロロが泣きながら歩いていた

「「あ」」

「お前・・・！」

「げ・・・トロロ新兵・・・タイミング悪すぎだろうが・・・」

やれやれとした顔をするルクク

「それはこっちのセリフだヨ・・・；ねえ、ホントにゾルルは元々反ケロン軍なの？」

「まだ、言ってるのか・・・そうだよ、あいつは反ケロン軍だぜえ？まあお前メンテナンスの腕はいいなーお陰ですぐに現場復帰ができたしよおそこは感謝すんぜえキキキッ」

「プ・・・っ」

「はあ・・・軍人なんかしてると、嫌でも裏切りなんてザラにあるんだぜえ？それを知ればさらに強くなれるし、高みにもいける。軍人としては常識の範囲だ。そこまでゾルルに裏切られたのがくやしいなら、捕まえてみろよ、それがゾルルにとってもお前さんにとってもいいことだと俺は思うぜえ何が正解で何が間違いとかな、人生甘くはねえんだ」

「・・・」

「キキキッ。やるよ、買い物の景品でもらったがガキじゃあるまいしいらねえからよ」

ルククはそういうと、トロロの手に飴玉を置いて去って行った

「トロロー！見つけたッスよ・・・って、なんスか？その飴玉・・・」

「そこで買った」

追いついてきたタルルに何故か咄嗟に嘘をついた。自分でもなんで嘘をついたのかわからなかった。

「まったく・・・自分で言えよなあ・・・」

「すまん・・・」

ルククの後ろにはゾルルがいた。先ほどのトロロに対してルククが言った言葉はゾルルの本音だ。

「まあ俺様の本音もあつたけどなあ」

そういうと、二人は暗闇に紛れたのだった

襲撃と庇い（前書き）

三話連続投稿してしまったorzコメントまたまたありがとうございます
Wあ、補足っぽいのがプルル看護長はあんまりでないかもですすみませ；

襲撃と庇い

反ケロン軍の襲撃から一週間が経った。ケロロ小隊・ガルル小隊は日向家で警戒態勢を強いている。

「休まる時がないでありますな・・・」

「少し休憩したら？軍曹」

「そーゆうわけにもいかんできます。いつ何時あちらさんが襲撃してくるかわかったモンじゃないでありますからね」

今ケロロは司令室で冬樹と一緒にいた。勿論二小隊一緒なんだが「でも、皆そんなに根詰めていたら体に悪いよ？」

「冬樹くん、心遣い感謝する。だが、警戒を一瞬緩めればたちまち攻められる」

冬樹も頭の中では理解しているつもりだったが、感情が先立ってしまう。

その時、警報が鳴った。

「着たか・・・！」

「冬樹殿は隠れてほしいでありますっ！」

「軍曹っ！」

入ってきたのはロギギとタナナだった

「こんにちは」

「暇してると思って遊びに来たぜ！」

「遊びとは・・・舐められたモンだな」

「絶対勝ってやるですう！」

「師匠、オイラも加勢するッス！」

その二人にガルルと突撃兵組みが構える。その瞬間、刃が交わる音がした。ドロロとゾルルが刃を交えているのだ。

「ゾルル兵長・・・！」

「・・・」

ゾルルは無言だった。そのまま戦闘に入る。ロギギはガルル中尉とプルル看護長、タナナはタママとタルルが相手をしていた。ケロロはケローボールを構えたままだ

「隊長同士の対決となるのか？」

「・・・ギロロ！」

ケロロの前にはギンロがいた。ギンロは銃を持っており、やる気は満々である。

「ギロロ・・・記憶を本当に戻して欲しいであります・・・我輩はギロロと戦いたくないであります！」

「何を。俺は反ケロン軍だ。それ以外でもなんでもない！」

「ギロロッ！」

ケロロとギロロが睨みあっている中、ギロロの背後では爆発音が鳴っている。

天井も激しい戦闘でひびが入ってきており、それは段々広がる
「ギロロ・・・我輩のこと、本当にわからないでありますか!？」

「・・・ケロロ小隊長、ケロロ軍曹だろう。それ以外に何がある？ 不思議なやつだな」

「ギロロ・・・」

ケロロは決意をしたように目を瞑り、目を開いた。そこにはもう迷いはなかった。

そんな時だった、天井の亀裂が広がり、崩れかけていった。

「え・・・？」

輝が広がり、瓦礫が冬樹の上に落ちてくる

「!?! 冬樹殿ー！」

「っ!?!」

瓦礫が落ちて、砂煙が立った。

「冬樹殿！」

「ぐ、軍曹・・・」

「無事でありますかっ！」

砂煙が晴れ、冬樹は瓦礫の奥に居た。

「無事だけど・・・誰かが、下敷きに！」

「ゲロっ？」

冬樹の言葉で場に沈黙になる。先ほどまでいて、今居ない人物は誰だろうと思ひ、冬樹は周りを見渡す

「・・・伍長・・・？」

「隊長！」

「隊長ー！」

ロギギとタナナが瓦礫に走りよる

「伍長・・・！」

「まさか、ギロロでありますかっ!？」

ケロロも駆け寄ろうとしたら、銃弾がケロロの足を掠めた

「寄るな・・・！タナナ、早く」

「わかってるですよ！」

「僕も手伝うよっ！」

冬樹もタナナと一緒に瓦礫を退かし始めた。

「いきました！」

ギンロは頭から血を流していた。

「ルクク。今回は撤退する。」

『了解』

通信機から、ルククの声が漏れた。そして、タナナの背後に超空間移動が開いた。

「ちょ、待つであります！ギロロを置いて行くでありますっ」

「隊長は俺達の隊長だ。置いていけるか」

「ギロロ伍長はケロン軍所属。ケロロ小隊の起動歩兵だ」

「違うな。隊長は反ケロン軍だ」

ガルルとロギギが睨み合う。ガルルは銃を構えたままだった。タナナの腕にはギンロがいた。ギロロ以上の腕を持つガルルにとっては、タナナだけを狙い撃ちするのは可能だろう。

「ギロロを・・・離すでありますっ！いったい、なんの目的でケロン

軍に奇襲なんて仕掛けたんですかっ？それにギロロにいった何を・・！？」

「ケロロ軍曹、ここは捕まえてはかせた方が早いですよ」

「そうでありますな・・」

「ちょ、ちよっと待って！軍曹！」

ケロロたちの行動を止めたのは意外な人物だった。

襲撃と庇い（後書き）

ケル..はい、隊長格雑談講座ー

ケロ..やる気無いでありますなあー;;;

ケル..おう。

ガル..今回は一気に急展開ですね・・・;

ケル..まあそういうモンだろ？

ケロ..まあそだけどさ;

ケル..この小説急展開モンばっかだぜ？気にしてたらキリがねえし

二人..ですよねー

ケル..じゃ一応明日も更新予定だし、次は突撃兵組みな

飛び込み、決意、爆弾発言（前書き）

今回は挿絵つきです W W ちょこちょここと挿絵を入れていききたいと思います W

飛び込み、決意、爆弾発言

ガルルの言葉で動き出そうとしたケロロを止めたのは冬樹だ。しかも、ロギギ達の前に立って両の手を広げている。

「ふ、冬樹殿！？どうしたんですかっ危ないでありますよっ！」

「彼らは伍長を助けただけなんだよっ」

「確かにそうかも知れないですが！ギロロは我輩達の仲間なんですっ！」

「でも、後ろにいる、彼らにとっても大事な仲間なんだよっ！」

ロギギたちは目の前にいる、冬樹に信じられなかった。自分達は敵同士でケロロ軍曹の親友と知っていたからケロロを助けると思っていた。だが、現状がこの状態で混乱する。

「そういう問題じゃないでありますっ！目的もわからないのに、ギロロを離せないでありますっ！」

『ケロン軍への復讐だ。目的は知れた、これで満足だろう？』

ロギギが持っている通信機からはケルルの声がした。

「知れたけど・・・なんで復讐するんですか！？」

『それを知る必要でもあるのか？ロギギ、ギンロを連れて帰って来い。』

「了解」

「あ、待つであります！」

ケロロが呼び止めるがロギギたちは無視して、空間に入った。だが、まさかの事態が発生した

「僕も行く！」

と言って冬樹まで入ってしまった。

「冬樹殿！？」

「えっ？」

ケロロの叫びと、ロギギの素っ頓狂な声を残して、空間は消滅した。

「冬樹殿ー！」

日向家の地下基地ではケロロの叫びが木霊した。

空間移動を完了し、反ケロン軍本部の司令室に出た四人。

「あゝ医療班ー！隊長、よろしく！ついでにこのペコポン人も！」

そう、ロギギが言うのと、どこからともなく数名のケロン人が入ってきて、ボロボロのギンロと気絶している冬樹を連れて行った。

「大将・・・どうする？あのペコポン人さ・・・隊長が・・・って、見たよな；」

「全っっ部な・・・日向冬樹か・・・検査で脳に異常がなきゃ帰しとけ」

「了ゝ解」

>i21930—2948<

ロギギはそういうと、タナナと一緒に去っていった

「しっかし・・・なんで、日向冬樹はロギギ達を庇った？あのガキにとっては庇う必要性はミジンコもねえんだがなあ・・・」

ケルルは疑問を口にするが、それを振り払い冬樹が目を覚ましたときに聞こうと思ったのだった。

「冬樹があっちに行った!？」

日向家では買い物に行っていた夏美が帰ってきて、ケロロから現状の説明を受けていた。

「どうしてっ？」

「最後の行動についてはまったくわからないでありますっ；」

「なんとかして、冬樹たちの居場所を調べられないの!？」

「それができれば、やってるであります！」

「今やってるぜえ」

「ほらっ・・・え？わかるんでありますか？」

「少し時間は掛かるが可能だ。連中が入って行った空間を調べ、どこに出ているかを調べれば一発だぜえくくクックク」

「絶対見つけ出してやるヨ・・・！」

クルルとトロロはすごいスピードで調べていく。ケロロは探索をクルル達に任せて、

「各員、すぐに突撃できるように準備してほしいでありますっ！」

「あたしも行くわ！」

「おじ様、私も行きます！」

ケロロの指示で夏美とモアも言い出した

「モア殿まで？」

「何か・・・嫌な予感がするんです・・・だから、行きたいんですっ！」
モアの決意でケロロは同行を許可した。

「ん・・・？」

冬樹が目を覚ますと、見慣れない天井が見えた。

「ここは・・・？」

「お、気が付いたか」

「君は・・・確か・・・ケルル？」

冬樹の寝ているベットの近くでケルルが読書をしながら、いた。

「そうだ。で、気持ち悪いところとかは？あるか？」

「ううん・・・ないけど・・・」

「よし。じゃ、こっちの質問に答えてもらうぜ？何故あいつらを庇った？」

「あいつらって・・・ロギギ達のこと？」

「そうだ」

冬樹自身もこの質問をされて、困っていた。自分でもわからないのだ、彼らを庇った理由が

「・・・おい、まさか考え無しに庇ったんじゃないだろうな？」

「え・・・と・・・アハハ；」

「マジで考え無しかよ；んな奴始めてみたぜ？」

「あはは；あ、伍長はっ！？」

「ギンロなら無事だ。まだ、意識は戻っていねえが大した怪我でもねえよ」

「よ・・・よかった；」

冬樹はケルルの言葉で安心する。そして、同時にある決意をする

「さて・・・質問にも答えてもらったし、帰すとするか・・・」

「ね、ねえケルル」

「あ？」

「僕をさ、反ケロン軍に置いてくれない？」

飛び込み、決意、爆弾発言（後書き）

タナ..はい、大将からバトン来ましたよお

タマ..何を喋ると・・・

タル..さあ?;

タマ..しっかし・・・フッキーがそっちに行きましたね・・・

タナ..来ちゃったねえゝあ、そうそう。今回から挿絵が少しずつ入るらしいよおゝ

タル..作者の薄汚い挿絵が?うわあ・・・破滅ツスよ・・・

タマ..すき放題だな・・・;

タナ..今回も三話か二話更新される予定ですよおゝ

条件と星の断罪者、少ない奇跡の日々（前書き）

今回も挿絵ありますww
ww

条件と星の断罪者、少ない奇跡の日々

「・・・は？」

冬樹の言葉で素っ頓狂な声を上げた。

「・・・テメエは何を言ってやがる？反ケロン軍に置いてくれないって、俺達はケロロ小隊達と敵対してんだぞ？わかってんのか？」

「うん。分かってる。僕が今言っている言葉は軍曹達を裏切る行為だとわかってるよ。けど、君達が他人とは思えないんだ。口調も性格も違うはずなのに軍曹達とダブって、しょうがないんだ」

もしかすれば、それがロギギ達を庇った理由かもしれない。ロギギやタナナがギンロを救出しようとした時、いつも馬鹿やってケロロがピンチの時のギロロとタママに見えた。だから、庇ったかもしれないと冬樹は思う。

「・・・はぁ・・・観察力は一端だな；」

「まあいいじゃないの？大将。本人が居たいっていうんならさ」

「テメエな・・・；勝手にしろ」

「ホント!？」

途中からロギギが入ってきて、ケルルはしょうがなくて言った。冬樹は喜ぶが、ケルルはただし、と言った。

「条件は二つだ。一つ、ケロロ小隊も馬鹿じゃねえだろう。この場所がバレるのも時間の問題だ。連中は乗り込んでくるだろうな。その時はあっさりあちら側に戻ること。いいな？」

「う、うん」

「うし、二つ目、俺達の正体をこれから言うが、それをケロロ小隊・ガルル小隊、関係者に言わないことだ」

「正体・・・？」

「ちょ、大将いいのか!？」

ケルルの二つ目の条件でログギが慌てる。途中から来たタナナも驚いた顔をしていた。

「構わねえどうする？ 守られなかったら、日向家に帰す。俺達の正体は自分達で言いたいからな」

「わかった、絶対に戻ってもみんなの正体のことは言わない。」

「うし」

冬樹はこの後、ケルル達の正体を教えてもらった。冬樹は知った真実に少し憤りを感じていた

そして、言い終わった後、ギンロが目を覚ましたということを知らせに来た

「お兄様。ギン兄が目を覚ましました」

「そうか。丁度言い終わったとこだ。サラ、自己紹介はやっておけ」
「うん」

ケルルはログギ達を連れて、病室を出た

「はじめまして、俺の名はアンゴル・サラって言うんだ。サラでいい」

「僕は日向冬樹って、言うんだ冬樹でいいよ。よろしくね」

二人が自己紹介を互いにやると、冬樹はあることに気づいた

「アンゴルって・・モアちゃんと一緒のアンゴル人？」

「・・・ああ。モアはそっち側だったな。モアとは異母姉妹なんだ。っていつても、もう絶縁状態だし、モア自身が覚えているかわからないし、お兄様達がここにいる反ケロン軍が好きだしね」

「・・・じゃサラはモアちゃんと敵対しても・・」

「ああ。どうも思わないな」

「・・・・・そっか」

淡々と語るサラに冬樹はただ、それだけを返した。そして、冬樹を連れ病室をでる

「敵対って言っても、殺すわけじゃないし、お兄様の邪魔しなきゃ敵対はしないさ。けど、無理そうだよな・・」

「うん・・・モアちゃん、軍曹のことすごく慕っているから;」

時々その尊敬が暴走することもあるのだが冬樹にとってはそれは日常としていた。

ケルルがギンロの病室に入ってきたのは、サラと冬樹が自己紹介している時だった

「よおギンロ」

「隊長ー大丈夫かー？」

「大丈夫ー？」

「ああ。大丈夫だ。あのペコポン人は？無事なのか？」

ギンロはベットの上で元氣そうに上体を起こしていた

「ここに置いてくれてよ。俺達のこと全部言った」

「正気か？いいのかそんなことをして」

「構わねえだろ。その代わり他言しないこと、ケロロ小隊が乗り込んだ時あっち側に戻ること。この二つを条件にした」

「そうか・・貴様がいいと言うのならそれでいいがな」

「隊長は大将に甘いし、大将は隊長に甘いしなー」

「僕達全員は隊長に甘いと思うけどねえー」

「違いねえキキキッ」

「だが・・ケロロ小隊の・・記憶を取り戻すのも時間の問題だろう・・」

>i21932—2948<

ギンロの記憶が戻り、決別するのは最初からわかっていた。冬樹が傍にいてことで戻る確立が増加された。

「隊長・・帰るのですかねえー」

「隊長は本来ここにいたら、ダメだからな」

「まあ」

ギンロの病室の外でこれからのことを思い不安になる四人。

「まあ奇跡の過ごす日々ってか？あと、何日かわかんねえけどさ。隊長がしたいと望むなら俺達はそれに従うだけだぜ？」

「皆伍長のことが好きなんだね」

「そうですねえ……え？」

タナナが声がした方を見ると、冬樹がにこやかにサラと一緒にいた。

「「「何時の間に!？」」」

「「「ついさっき」」

四人の疑問に即答で答える二人。すると、病室からケルルが顔を出し

「何やってんだ?；テメエら」

「い、いや……」

呆れた様子で呟いたケルルにロギギは苦笑混じりに返す。他三人はげっそりしており、冬樹はわかっていないようで頭上にハテナがあり、サラにいたってはケルルに会えたからご機嫌である。

「まあいい。テメエらも準備すんぞ」

「へ?何の?」

「ケロロ小队撃退場。ですよね?」

「ああ。冬樹はギンロといていいぞ」

「わかった」

そういうと、ケルル達は姿を消した。冬樹は見送ると、病室に入っていた

ギンロの心と冬樹の言葉（前書き）

今回は挿絵ないですし短いです；；誤字を見つけたので修正しました。

ギンロの心と冬樹の言葉

「伍長・・怪我大丈夫？」

「ああ。だが、いいのか？ 貴様はあちら側だろう？」

「うん・・・それに伍長のことも心配だったしね・・」

「・・・一つ聞いていいか？」

「いいよ」

「・・・・俺はあそこに・・・ケロロ小隊にいたのか？ 本当に・・」

「・・・・ねえ伍長、これは僕の独り言だと思ってね」

混乱しているギンロに落ち着いた声で話しかける冬樹。

思い返すのは、はじまりは姉の嘘。ケロロの存在がバレ、何時の間に居候することになって、ケロロの仲間のタママ・ギロロがやってきたり、クルルが学校の先輩と来たり、姉のクラスメイトが忍者だったりドロロと喧嘩してたり。

ケロロのくだらない作戦。本気で危なかったガルル小隊との対決。ゼゼゼツ・トトトソの存在。

「でも・・・いつも皆軍曹の傍にいてる。みんな危険な目にあったけど、そんな中でいつも伍長に助けられたんだ」

夏美のために宇宙ケルベロスの肝を取ったり、キルミランの時バリアに機械ごと突撃して破壊してくれたり、夏美が浚われた時には真っ先に先陣切ってたり。

「僕ね、ふとして聞いたんだ。伍長に」

「？何をだ」

「『『どうして、強くなろうと思ったの？ どうして軍人になろうと思ったの？』って』」

「それは・・・」

「伍長曰く「護りたい」から力を欲するんだって」

「護る、ために・・」

「そうだよ」

今でも冬樹の脳裏にギロロが答えを告げた時の表情を浮かぶ。恥ずかしそうなそんな表情。
「そうか・・・」

ギンロの心と冬樹の言葉（後書き）

タナ..次は起動歩兵組なんで・・・よろしくですよぉ

過去、思い返すは真紅の君（前書き）

今回はケロロとギロロが初めて会った話です
捏造だらけなのでそのところご了承ください。

過去、思い返すは真紅の君

反ケロン軍の本拠地を見つけ出したケロロ達は突撃準備していた。簡単に移動できるので一週間後に突撃することが決定した。夜日向家の庭を眺めていた

「ケロロくん・・・」

「ん？お、ドロローどうしたんですか？こんな時間に」

ケロロが言うとおり、時計の針が指しているのは十一時である。

「眠れなくて・・・そういうケロロ君は？」

「我輩でもあります」

「・・・ギロロくんのこと？」

「・・・ドロロにはバレるでありますなー」

ケロロとギロロとドロロは幼馴染だ。昔からの付き合いである。

反ケロン軍にはギロロもゾルル兵長もいる。ケロロたちが乗り込むのなら戦うしかないだろうと思う

「我輩ってさ、ドロロと出会う前にギロロに会って、最初さすっげ

ー仲悪かったんですあります」

「え・・・？仲、悪かったの？」

>i21931—2948<

「すっげー悪かった。悪戯悪がき集団のリーダーまがいなこと当時の我輩がやっていて、優等生の筆頭がギロロだったの」

当時の少年訓練所でケロロが始めてギロロと会ったときだった。最初はとく仲よくも悪くもなかった。あえて言うならただのクラスメイトという関係だった。

だが、幼年訓練所から悪戯好きだったケロロを筆頭に悪戯集団ができてつあった。そうすると自然に悪戯しない子供たちはそいつらで集団を作っていた。その筆頭が優等生のギロロだった

「優等生・・・って、あのやんちやのギロロくんが？」

「そうそう。今も固いけど昔は今よりもっと固かったんであります。そんな真面目なギロロと不真面目な我輩達は仲良くなんて、最初は無理でありました。当時の我輩はさあそんなギロロがムカついて、消しカス飛ばして当ててみたり、落とし穴やってみたり悪戯してやっただよねー」

「Σ落とし穴！？；」

だが、ギロロはそんなことをまったく気にしなかった。そんな時期に演習があった。サバイバルの一種で二人一組になって、旗を取って来いという指示だった

「その演習なら知ってるよ。もしかして、その時に仲良くなったの？」

「そうでありますね。当時遅刻してきた我輩と堅物な性格なせいではなかったギロロが組まされてさー我輩文句だらだらでありましたが、教官に問答無用って言われて演習したんでありますが、敵から逃げていたら崖から滑り落ちて、我輩は足りじいて、ギロロは手首を強く打ってさ・・・」

その時ケロロは自分を置いて行けとギロロに言った。どうせ、自分は嫌われてるから普通の奴なら自分を置いていくと思った。だが、ギロロは違った

『嫌だ。絶対置いてなんかいかない。お前、犠牲にして勝つ勝利なんていない！』

「んで、ギロロは我輩を背負って、旗があるところまで行って、見事ミッションコンプ。」

それからだった、ケロロとギロロが仲良くなったのは、ギロロは周りから将来有望視されていたのをプレッシャーに感じており、自由気侖なケロロが羨ましかった。と語っていたのを思い出す

「それでギロロのやつ、優等生すんのやめて、我輩達と一緒にいる

ことが多くなっただけであります」

「へえ・・・」

ドロロにとってはじめて知る真実だ

「だから、今まで喧嘩なんてザラだったよ？我輩が我俣言って、ギロロが銃ぶっ飛ぶばして、喧嘩が始まるのは今までも・・・いや、これからでもあります」

「ケロロくん・・・だったら、早く助けなきゃね」

「で、ありますなー」

過去、思い返すは真紅の君（後書き）

ログ..はい、恒例（？）の雑談会ー

ギロ..恒例か？

ログ..恒例じゃね？

プル..三回目だものね・・・所で・・・

二人..？

プル..どうして、私の出番が少ないのかしら・・・？（黒笑）

ログ..え・・・？そっち？；

ギロ..俺は『ギロロ』としては未登場だ！；

ログ..（そういえば、最初からギンロとしての登場だよな；隊長）

プル..私は姿すら出てないわよっ？

ログ..え・・・と、作者から、『プルは少し苦手だし、いちお出す予定は少しはあるらしい』・・・だと。

プル..・・・。どうせ、私なんて・・・

ギロ..；；（トラウマに入った；）

乗り込みと一騎打ち（前書き）

連続投稿二回目？；かな？

乗り込みと一騎打ち

ケロロ小隊が戦闘準備期間の一週間が終わり、本日が奇襲されると知ってか知らずか、ケルル達は・・・

「・・・これで、僕の話は終わります・・・でどうだった？僕の怪談」

「怖えわ！普通に！；」

怪談をしていた・・・って、いいのか、そんなんで

ケルルは顔を青ざめているが、タナナは泣いているし、ロギギとルルクにゾルルも震えているし、ギンロにいたっては気絶していた。「しかし・・・冷や汗、戦闘以外で始めて流したぜ・・・；反ケロン軍アサシントップのゾルルを震えさすとか・・・ギンロー；大丈夫か？；」

ロギギがギンロを揺さぶるが、応答なしである。ただの生きる屍のようd

「勝手に殺すなっ！」

「あ、目え覚ました♪」

ナレーターのリフ途中で目を覚ましたギンロ

「・・・何故だろう・・・この、二度目っていう感じ；」

それをデジャブ、と言います

「あはは；」

その一度目の原因も冬樹くんの怪談だというのは言わない。

怪談の片付けをしていると、警報が鳴った。

「何事だ？」

『大変ですっ！ケロロ小隊たちが、乗り込んできました！』

「わお！以外に遅かったですねえ」

「まあいいじゃね？」

「うし、テメエらは何もするな、ケロロ小隊とは少なからず俺達と

は因縁がある」

『りよ、了解!』

「よし、冬樹。テメエは下に行け」

「え・・・?でも・・・」

「条件。だろうが。いいな?」

「・・・うん、わか——」

冬樹がそう言いかけた瞬間、その場に穴ができ、落ちた

「・・・ルクク;」

「悪い; 反対されると思ってよお; じゃ、俺もクルル曹長と戦ってくるわ」

「ああ」

そういうと、ルククも姿を消した

「さて・・・テメエらも準備しておけよ」

「「「了解」」」」

「俺は?」

「ギンロは俺と一緒に最終ラウンドでな」

ロギギたちは自分の持ち場に向かう。ケルルとギンロは奥に行った

ケロロ小隊たちは走っていた。乗り込んで早十分近く、一本道の廊下が続いている

「結構長いでありますなー・・・」

「ですが、油断できませんよ」

「でも、誰もいませんね・・・警報が鳴って結構経ちますけど、普通定番として、何人か、普通来るモンッスよ?」

「確かに・・・もしかして、ケロン軍に行ってるからいないとか?」

「それはないかと思うでござる。罠・・・あえて、誘っているとは思わないでござる。どうする? 隊長殿」

ケロロたちは歩きになって、ケロロとガルルは思案顔になる

「しかし、もう乗り込んでしまったであります。このまま突っ切るでありますよ! ガルル中尉殿、これでいいでありますか?」

「はい。私も、同じこと考えていましたしね」

ケロロ達は再び走り出した。

ところで冬樹はと言うとケロロたちが廊下を走ってくれば最初に辿りつく格納庫に落下していた。

「び、びっくりしたあゝ！！いきなり落とすことないだろうに・・・！」

冷や汗全開である。落ちる時も怖かったが落ちる途中も真っ暗で怖かった

「ここって・・・第一格納庫?;」

ケルルが以前、反ケロン軍VSケロロ小隊&ガルル小隊の舞台を作り出したのだ。その見取り図は冬樹にも見せられた。

「ここに落とされたってことは軍曹達はまだ、廊下の部分にいるのかな・・・?」

冬樹は座ってケロロたちがやってくるのを待っていた。

五分後、ケロロたちがやってきて無事に合流した。

「大丈夫でありますか?」

「うん。大丈夫だよ」

最初は偽物かと疑われたが、誤解も解け先に進むことになる。次に着いたのは畳の部屋で、空手の道場のような場所だった

「(確か・・・ここはタナナがいる部屋)」

確かに冬樹が思ったとおりにタナナがいた。

「ようこそここが第一ラウンドステージですよ」

「第一ラウンド・・・? お前を倒さないと先に進めれないっていう法則でありますか?」

「え? 違いますよお、僕と因縁があるのはタママ二等兵だけで、その他は僕の管轄外ですので」

「僕ですか・・・?」

ケロロの台詞をあっさり否定して、自分の本心を告げる。突如指名されたタママは驚く。だが、同時に納得もした。

「わかったですう! お前の相手は僕がするです!」

「タママ!？」

「軍曹さん、先に行ってください。」

「単独行動は・・・」

ガルルとケロロが何か言いたそうだが、タママは構わず行けという。タルルも残るというが

「軍曹・・・お願い、タママとタナナの一騎打ちをさせてあげて」

「冬樹殿!？」

「詳しくは言えないけど・・・けどっ! タナナも決着を着けたいんだ」

「冬樹殿・・・」

冬樹の言葉は曖昧だがその瞳には強い意志があった。

「・・・分かったであります! タママ二等兵、その者の相手は任せるでありますよっこれは一騎打ち!」

ケロロは言うやないなや、タルルの首っこを掴み走り出す。慌ててガルル達もその後続く。

「ケロロ隊長・・・! いいスカ!? 師匠だけで!？」

「我輩はタママが負けないと信じているであります」

タルルの台詞にきっぱりと言い返すケロロ。

ケロロは最初っからタママが負けるとは思っていなかった

「あっ冬樹!」

「え・・・?」

「ありがとうございますよ」

そのありがとうの意味を聞くほど冬樹も馬鹿ではなかった。

自分とタママを一騎打ちにさせてくれてありがとう。

「・・・どういたしまして!」

そういうと、冬樹は振り返らずにケロロ達と共に行ってしまった。
・

乗り込みと一騎打ち（後書き）

次はタママVSタナナです。けど、作者が戦闘シーンが苦手・・・うまく表現できませんが生暖かい目で見守ってください。

突撃の想い、起動の想い（前書き）

今回は挿絵あり、タママVSタナナ&ガルルVSロギギですw
やけにタナナ&ロギギの想いをぶつけます。突撃〓タナナ 起動
ロギギです

突撃の想い、起動の想い

タママとタナナは似ていた。瞳の形も色もどことなく似ていた。マークだって、タママのを反対にしたただけだ。

「ようやく・・・この時が来たんですね・・・昔は、あの人がいたから・・・やめましたけど・・・今回は我慢しなくていいんですね！」
「何をさっぱりですけど！僕もお前と戦うことができて嬉しいですよ！」

>i21971—2948<

「（タママ／タナナ）インパクト！！」

二人共似た技をそれぞれ放つ。煙が晴れると、二人共無傷だった。沈黙する・・・

その沈黙を破ったのはタママだった。得意の体術でタナナに向かう。タナナもそれに答えるように構える

「どうして・・・！どうして、ケロン軍を襲ったんですかあ！？どうして、伍長さんがそっちに居るんですか！？」

「・・・ケロン軍に対する復讐ですよ、別に昔はね・・・どうも思っていないかったです・・・ケロン軍は憎んでいましたけど、段々どうでもよくなりましたってねえ・・・まあそれなり平和な暮らしをしてました・・・けど、僕達を生きる希望を与えてくれたあの人をケロン軍は傷つけた・・・それだけで十分なんですよお！」

タナナの叫びはタママと打ち合いしていても続いた。

タママを置いて、ケロロ達は次の場所に着いていた。今回は殺風景な場所でゴツゴツとした岩などがあった。

そこにロギギがいた。ロギギはガルルと似ていないかもしれない。性格も反対だし、色もガルルと言うよりギロロに似ている節もある。

ゴグルもしている。

「よお・・・結構遅かったじゃねえか、ここが第二ラウンド・・・んで、俺が指名するのはガルル中尉だ」

ロギギの指名でわずかに眉をひそめるが、ガルルは無言で銃を転送した

「隊長!？」

「ここは私に任せて先に」

「了解であります」

ケロロ達は了承すると奥に駆け出す。

>i21972—2948<

第二ラウンドにはロギギにガルルしかない。

ケロロ達がいなくなった瞬間、銃の発砲音が聞こえ、次には二人共がすごいスピードで銃撃戦を繰り広げていた。

その最中ガルルは聞いた

「何故、ケロン軍に奇襲を仕掛けたっ？友好関係とはいかないが、それなりな関係はあったはずだ。それが何故・・・！」

「はっ知るかつ！昔は、どうでもよかったんだ・・・復讐とか、そんなのはあの人に会って、俺達は復讐心をなくした、あの人 of 憧れの場所を亡くさないために・・・！」

「あの人・・・？」

ロギギの台詞に疑問を覚えるガルル。だが、ロギギの言葉は嘘ではないと判断した。目が言葉は真実だと語っていた

「隊長のことだ・・・隊長は覚えていないだろうな・・・けど、俺達には十分だった。だから、護ろうと決めた。俺達のすべてを掛けでも護ると皆で誓ったんだ・・・！」

激しい銃撃戦の中その言葉ははっきり聞こえた

「それをケロン軍は傷つけた！復讐心を再び出すにはそれで十分だっ！」

攻撃が激しくなった。

突撃の想い、起動の想い（後書き）

ルク..参謀雑談会ゝ・・パチパチ・・

トロ..拍手を口で言う？普通；

クル..ほっとけ。

ルク..キキキツつう訳で今作の感想は？

トロ・クル..最初から最悪#；（ゾルル／先輩）が敵になるとか・・

ルク..うわぁ・・息ぴったし・・まあ俺はラツキーwだけど♪

二人..##

参謀の想い、暗殺の想い。星の断罪者の想い（前書き）

今回はルククとゾルルとサウさんの想いですW

参謀の想い、暗殺の想い。星の断罪者の想い

日向家に残って、電腦戦をしているのはクルルとトロロ。相手はルククだ

「オメエの狙いがわからねえなあ」

『何、復讐だ。昔は結構どうでもよかったけど、今はそう言ったらねえ状況でなキキッ』

通信するということはそれだけの余裕があるのだろう。最早蚊帳の外であるトロロは呆然と見ていた

『ゾルルだけどなあ・・・別にスパイ活動のために入れた訳じゃねえよ。元々、あいつは自分の意思で入った。あの人の手助けになれるかも知れないと言ってな。ただ、今回が丁度いいってことだったんだ』

>i21973—2948<

そうそれだけのこと。今回の計画はココ最近でできたモノでゾルルを組み込もうとしたのもゾルル自ら言い出した。

以前、ルククがゾルルのメンテナンスを行っていてふいにゾルルが語りだしたことがあった。

『俺は・・・反ケロン・・・軍が・・・帰る場所・・・だと思っている・・・だが、ガルル・・・小隊も・・・心地がいいんだ・・・』

『あ？んだよ、いきなり』

『家族は・・・お前ら・・・だけ・・・なのに、あいつらの・・・顔が・・・離れない・・・のは何故だ・・・』

ルククはその問いかけに対する答えは知っていたが答えなかった。トロロも似たようなことがあった。メンテナンスをしているとゾルルが突然言い出したのだ

『何故・・・お前らは俺に・・・構う・・・』

『は？いきなりナニ？・・・当たり前じゃん？ゾルルの仲間だしさ』

『仲・・間・・』

それ以降は何も言わなかった。

ケロロ達は次の場所にやってきていた。岩が浮いており、いつぞやのアサシンゾーンのようなようだ。

「ゾルル殿・・」

「待っていたぞ・・ゼロロ・・！」

プレートを出して戦闘準備が万端なゾルルが浮いている岩の上に乗っていた。

「隊長殿」

「・・・こんなチマチマとして、いったい何が目的なんですか？」

「ぐ、軍曹・・！」

「冬樹殿はお静かに！ いったい何が目的なんですか？」

冬樹は口を開きかけたがケロロに言われ、閉ざす。だが、意を決して口を開いた

「・・・軍曹！」

「Σゲロ！？・・・冬樹殿・・？」

「冬樹・・？」

冬樹が怒鳴ったのを、ケロロと夏美は驚いた表情で見ていた

「ゾルルやみんなも覚悟のうえなんだ。彼らの境遇だったら一対一で決着を着けたいんだ。そこは僕達が邪魔をしたらダメなんだ」

冬樹は言うやないやな、ケロロを掴んで走り出す

「ちょ！冬樹殿！？」

「ちょっと待ちなさいよー！」

ケロロ達の抗議があったが、冬樹は無視して走った。

「・・・感謝・・するぞ・・」

途中で小さく。だが、はっきりとゾルルの声がした。

>i21974—2948<

「何故・・このようなことを・・？」

「何が・・・だ」

「何故、ガルル小隊を裏切るような真似をしたのでござるか!？」

次の瞬間二人はその場に居なく、刃と刃が交わる音が響いた。ゾルルはプレート、ドロロは短刀を交わらせていた

「俺は・・・反ケロン軍人だ・・・帰る・・・場所も・・・家族も・・・そこだけだ・・・!」

「しかし、一度はガルル小隊に所属した身、そんな簡単に割り切ることはないでござろう!？」

「どうだか・・・!こんな・・・半分機械の俺を・・・受け入れてくれたのは・・・ケルル達だけ・・・だった・・・!あいつら・・・だって、俺の・・・ことを気味悪がって・・・いたはずだ・・・!」

「そんなはずはないでござる・・・!トロロ殿は本気でお主がいなくなったことに悲しんでいた・・・それがわからないのでござるか!」

「貴様に・・・何がわかる・・・!反ケロン軍は・・・最悪な言葉を・・・借りれば・・・寄せ集め集団・・・にすぎない・・・!そんな・・・俺達に・・・ギロロは生きる希望を・・・くれたんだ!」

ゾルルは強い意志で零次元斬と共に放つ。

ケロロたちが次に着いたのは最初の格納庫と似ており、何もなかった。そこに彼女はいた

「サラちゃん・・・」

「やあ冬樹」

アンゴルⅡサラがそこにいた。モアは瞠目していた。

「サラ・・・お姉様・・・?」

「お姉様!？モアちゃん、姉妹いたのっ?」

「異母姉です・・・」

モアは震える声で説明した。

自分が幼い頃、何度か会ったことがあった。だが、いつの間にか姉は会いには来てくれず、自分が行こうとしても、いなかった。

「ああ・・・そうか。お前は知らないんだっけ?俺がアンゴル族を

追い出されたってことを」

「え・・・？ 追い・・・出された・・・？」

「そ。お前と違って俺は純血のアンゴル星人じゃないんだ。母親が違ふ・・・アンゴルの他の者達はそれが気に食わなかったようで、俺と母上を追い出した。俺がここに居るのは母上に売られたからだよ」

「売られたって・・・どういふこと・・・？」

「そういうこと。母上に売られて、俺はお兄様に拾われた。両親の記憶なんて、そんなにないよ。俺の育て親はお兄様だからね」

サラの言葉に夏美たちは瞠目していく。サラはなんと、その事実を笑顔で言っているのだ。

「なんで・・・お姉様は・・・そのようなことを笑顔で、言えるのですか・・・？」

「え・・・？ んん・・・あれかな、あまり両親を両親と思っていないからじゃない？」

彼女の記憶には両親の記憶はほとんどない。赤ん坊の頃は覚えていないので知らないが、物心付いた頃にモアが生まれた。一度でも見に行こうとすれば父はそんな彼女を見て早々にモアを隠す。母親も自分に愛情をくれなかったと思う。与えられた部屋では母親が訪れることはなく、いつも一人だった。食事も風呂も就寝も一人で行った。

そして、ようやくモアと会えたのはモアが三歳の頃だった。モアと会って一年間は姉妹らしい生活をしていた。だが、ある日、母と父が尋ねてきて、母はサラの腕を引っ張り父はサラに見て

『今日からお前は私の子ではない』

と言いつつ放った。その後母と共にアンゴル星を出て、母親に売られた。鎖で繋がれ雨で打たれていたところをケルルに見つけてもらい連れ出してくれた。

ケルルは兄と同時に親でもある。与えられた部屋で休憩時間になると必ずケルルはサラの部屋にやってきた。ケルルだけではない、

ロギギ達もやってきていた。勉強を教えたり、食事も就寝も時たま風呂にも一緒にいてくれた。

サラにとっては、ケルル達は家族であり、両親同然なのである。

「・・・モア、俺だってお前と敵対なんてしたくないさ。大事な妹だしね・・・けど、お兄様の邪魔をするなら少し眠ってもらうことになるかな？」

サラとモアが話している間、ケロロとタルルはこそこそと話していた。タルルの手にはアングルストーン、アングル人を封印する石だ。何か起きた時にサラに使用おうと思っていたが・・・

参謀の想い、暗殺の想い。星の断罪者の想い（後書き）

ゾル.. 雑談会・・・だ・・

ドロ.. とは言っても・・・何を話せば？

ゾル.. ・・・。ゼロロが・・・おねしょした・・・回数・・

ドロ.. えっ!?!; ;

ケロ.. あゝそれ知りたい知りたい!

ドロ.. Σちょ、ケロロくん!?!?

ギロ.. おい、ケロロ、ゾルル。可哀想だろうが; ;

真実（前書き）

ケル..今回は俺達の正体だな

タナ..ですねえゝ

ログ..俺ってさ・・・一番中途半端なんだよな・・・；

ルク..いいじゃん

ゾル..・・・。

短いですがどうぞ。

真実

「アングルスストーン・・・か・・・準備がいいな」

「あ・・・！」

それは失敗に終わった、ギンロが取り上げたのだ。ギンロは石を
ほると銃で打ち抜いてサラの隣にきた

「ギン兄・・・」

「油断するなよ。サラ」

「うん。ありがとう・・・」

サラは本当に嬉しそうに礼を言った。ギンロはそれを溜息をつき
ながら、相手をしていた。夏美の胸が少し痛んだ

「・・・？」

「ギンロ・・・銃を下ろせ」

夏美の疑問はケルルの台詞で掻き消えた。

「だが・・・」

「構わねえよ」

「いったい、我輩たちになにを・・・！」

「まあ焦るなケロロ軍曹。まだ、連中までいねえからな」

そういうとケルルは指を鳴らした。すると、移動空間が四つ開き、
そこからタママ・タナナとガルル・ロギギにクルルとトロロ・ルク
ク、ゾルルとドロロが出てきた。参謀組以外は傷だらけである。

「ゲロツ？皆！？」

「大将！勝手にやらないでくれよ；」

「そうですよおー」

「・・・」

戦闘兵組みは文句（ゾルル以外）を言うがケルルは無視した
「で、何が目的で？」

「俺達の真実を言おうと思ってな。」

「真実？」

ケルルの言葉で冬樹を除くケロロ達側が驚く。

「そうだ。クローン計画・・・隊長の素質はクローンが用意されているのは知っているよな？」

その言葉にケロロ達は不思議に思いながら頷く

「まあそのクローンを優秀な兵士にも利用できないかとケロン軍の上層部は考え出した。ケロロ軍曹は隊長の素質から、タママ二等兵は新兵ながらにその戦闘力から、ケルル曹長はその天才な頭脳から、ドロロ兵長はアサシントップから・・・連中は目を付けた」

ケルルが語っていると同時にケルルはケロロの前に、タナナはタママの前に、ルククはケルルの前に、ゾルルはドロロの前に移動した。

「まさか・・・！」

「そのまさかだ。目の前にいるお前らこそが俺達のオリジナルなんだ」

ケルルが冷静に告げた。

真実（後書き）

今回は短いのですが、どうしてもこれは単品としてやりたかったんですww

破壊プログラムと精神世界干渉（前書き）

ケル..いきなりの..

ケロ..新展開でありますなー；あー..怖っ；

ギロ..なんか・俺がどんどん俺じゃなくなっているような・・・；
二人..あえて、否定はできないなあー・・・；；

破壊プログラムと精神世界干渉

ギンロはそれを眺めていた、ケルルに銃を下ろせと言われたが、少し下ろしただけで完全には下ろしていなかった。

だが、様子が変になったのも事実だった、ケロロ小隊・ガルル小隊・反ケロン軍のケロン人が集合したときから変だった。胸の奥がざわめいているのだ。ドクン、ドクンと脈を打つような感じだった。頭の中で声が響いていた

―すべてを、破壊せよ―

そこでギロロの意識は途絶えた

ギンロの異変に最初に気が付いたのはロギギだった

「隊長・・・？」

ロギギの台詞が合図だったようにギンロは動いた

―ガキン・・・！―

「ギンロ・・・！？」

ギンロの攻撃を受け止めたのはケルルだった。ギンロは狂気の満ちた瞳をしていた。

ギンロの左腕は乾いた音をしながら、変化していく。次の瞬間、壁が爆発した。

「あれは・・・ケロン星母艦！？」

ケロロが言った通り、ケロン星母艦がそこにあった。母艦から光が伸びると、ギンロは転送されかけていた

「ギロロ！」

「ちい！」

ケルルがギンロに腕を伸ばすと、銃の音がした、母艦の一部から

煙が出ている。ケルルの脇腹が血に染まる

「大将!？」

「がっ・・・くそ・・・!」

「ギロ・・・!」

『これより、ペコポン侵略を始める。ケロロ小隊、ガルル小隊は手を出さずに見ているように。これは命令である。』

「待つて欲しいでありますっギロロ・・・ギロロ伍長をいったいどうするつもりですか!？ いったい、彼に何を・・・」

『・・・ギロロ伍長は今回の作戦で重要だ。いいか、このことは関わるな。命令だ』

母艦はそういうとギンロを乗せ、消えた。「・・・大将、怪我怪我!；」

「問題ねえ・・・」

ケルルは顔をゆがめたまま、包帯を巻いていく。ケロロとケルル、同時に変化があった。

ズキン・・・!

「ゲロ!？」

「な・・・!？」

頭痛がしたらと思ったら、ケロロ達は意識を手放した。

暗い水の中・・・何かが落ちた水の音、それがすべての始まりだった。

ケロロは目を覚ます、その暗い水の中で直立にして

『ここは・・・どこでありますか・・・?』

喋ってケロロは気づく、声が出ない、否、出ているのだが反響せず出ている気がしなかった。空気の泡が口から出て行くが、不思議に苦しくはない。

『我輩って・・・ああ、そうだ。頭痛がして、倒れたんだっけ・・・タママたち心配しているだろうなー・・・ってかここどこよ!；』

以前冬樹と行った深海行った事があるがそこと似ていた。

先ほど頭に響いた音・

『何かが落ちた水の音、それがすべての始まりだった……って
という意味でありますか？』

ここに留まってもしょうがないと思い、歩き始めるケロロ。
以外に歩けることに驚く。

『不思議なところありますなー・でも、同時に懐かしく思えるの
は何故？』

ケロロが不思議に思っていると、上から何かが水の中に落ちてき
た。

ケロロがよく目を凝らしてみると、それは

『ギロロ！？』

ギロロだった。ケロロは駆け出した。もう少しで、ギロロに届く
と思ったら反対側にケルルがいた。互いが互いを確認し、瞠目する。
ギロロはケロロ達が触れる前に泡となり、消えた。だが、その泡
の中に文字がある

『ハ』『カ』『イ』『プ』『ロ』『グ』『ラ』『ム』

『ハカイ……プログラム……？なんのことでありますか？ギロロ・
……』

呆然と何のことかわからないケロロは泡と化したギロロの泡を見
ていた。文字がある泡も消え、そこには瞠目しているケルルとなん
のことだかわからないケロロがいた。

『破壊、プログラム……だと？あれはケロン軍が使用を停止した代
物だろ……』

『泡の言葉がわかるんですか！？』

ケルルが呆然と呟いた言葉に反応するケロロ。

『……破壊プログラム。昔、ケロン軍が開発した、戦闘プログ
ラムの最高にして最悪のプログラムだ』

戦闘プログラム。名の通り自動人形に戦闘に向いているプログラ
ムを入れ、戦闘を行わせるためだけのプログラムだ。だが、そのプ
ログラムは敵味方に時々見境がないため、ほとんど使われていない。

ケロロ達も少年訓練所で習ったぐらいで実践では一・二回ほどしか見たことがない。

『戦闘プログラムの？でも、そんなの聞いたことないでありますよ？』

『当たり前だ。破壊プログラムの行動は一つ。徹底的の破壊。破壊し、壊滅し・・・そこには計画性も作戦も侵略性も小隊も軍も星も、そこに住む人々も関係ねえ・・・プログラムの本能のまま、すべてを破壊しつくす。それが破壊プログラム。あまりにも危険すぎる代物でな・・・軍の当時の大元帥がそれを禁じた』

ケルルの説明で段々青ざめていくケロロ。

『でも、それがギロロとなんの関係が？』

『おそらく、ギロロの中に破壊プログラムが組み込まれている。あのプログラムは本来、兵士に組み込まれるよう開発されてる。同時にナノマシンも入れられる。左腕が変化していたのはわかってんだろ？』

ケルルの言葉でギロロの左腕から鳴っていた乾いた音は変化の途中のだと気づく。

ケロロはギロロが暴走し、ケルルに攻撃をした時一番ケルルの傍にいたせいか、音は聞こえていた。最初は気にしていなかったが今言われて、気づく。

『あの、乾いた音・・・』

『そうだ。おそらくアレだろうな』

『って・・・大体はわかったですが、ここどこ？』

『・・・さあな』

ギロロが暴走した原因は大体わかった。だが、ここからどうやって戻るのが問題になる。原因がわかっててもそれを他の皆に伝えないとどうでもならない。

『・・・ギロロが関わってる場所でありましょうか・・・？』

『まあ・・・そうかもな。もしかすれば、非現実なことだがギロロが俺達に何かを伝えたくて態々こうしたってとこだろ』

『そして、その伝えたいことは・・・』

『破壊プログラムのことだろうな。それ以外に検討がつかねえし』
ケルルの言葉通りなので、ケロロはその場に座り込む。

『目を瞑ったら意外に戻れたりして』

場違いな意見を出すケロロだが・・・

『いいな、それ。案外戻れたりして』
賛同するケルルだった。

そして、ケロロの提案により、二人共が寝転び、目を瞑る。現実
に戻るように・・・

破壊プログラムと精神世界干渉（後書き）

もう一話更新します。

統帥の怒りと覚醒プログラム（前書き）

今日はここまで
W

統帥の怒りと覚醒プログラム

「・・・そう！軍曹！」

「・・・しょう！大将！」

ケロロとケルルは冬樹とロギギの声で覚醒した。

「あれ・・・冬樹殿・・・」

「るせえぞ。ロギギ」

「よかった・・・！」

「Σひでえ！」

ケロロは呆然とし、ケルルは耳元で騒いでいるロギギに言い放つ。
二人が回りを見ると、まだ乗り込んだ反ケロン軍ケロロ小隊撃退基地の奥（略して、撃退基地司令室）の場所にいた。それぞれがロボロなのを確認して、今までの夢じゃないと再認識したケロロだった。

「軍曹・・・大丈夫？」

「え・・・と、我輩達はいったい・・・」

「いきなり、ボケガエルと隣にいる奴が頭を抑えたと思ったら倒れた・・・でいい？」

「簡潔説明どーも・・・；」

夏美の説明は簡潔すぎるが逆に分かりやすかった。その説明に苦笑しか返せなかった二人である。

「ケロロ軍曹。硬直や苦笑いしている場合ではありませんよ」

「ゲロ？」

ガルルが指したのは出入口。そこには老いたケロン人がいた。ケロロはそれを何度も遠目から見ていた。ケロン軍最高権力者の

「大元帥殿・・・！」

だった。ケロロ小隊やガルル小隊（ゾルル除）は敬礼をし、ケルル達は遠い目をし、地球人たちにはちんぷんかんぷんだ

「そんなに固くならなくていい。早速本題に入ろう」

「破壊プログラム。」

「っ!？」

大元帥の言葉を遮り言い放つ、それが凶星だと判断したケルルは尚続ける。

「昔、ケロン軍が作った戦闘プログラムの生物用。すべてを破壊し、星を塵と化す。人の手としては最も最悪なケロン軍兵器。危険物特例第一級・・・違うか？」

「何故君がケロン軍の機密事項を知っているかは今はどうでもいい。そうだ、今ギロロ伍長を動かしているのは本人ではなく、破壊プログラムだ・・・今回のことは私に非がある。命令でもなんでも止めるべきなのを止められなかった・・・すまない・・・!」

大元帥が頭を下げたことにより、ケロロ達は慌てる。だが、そんな慌てるケロロとガルルの脇を通り過ぎる人物が居た。ケルルだ。

ケルルは大元帥の前まで来ると

「面^{ツラ}を上げる」

と言った。言葉通り大元帥が顔を上げると、その瞬間ケルルは大元帥を殴り飛ばしていた。これにはその場にいた全員が驚愕した

「ちよ、ちよっと! 大将! いきなり、大元帥殴るって・・・!」

「そうでありますよっ! 無茶苦茶であります!」

「貴様・・・何をやったか・・・わかているのか?」

慌てる二人を他所にガルルは静かに言う。ケルルはそんなガルルを一瞥するがすぐに視線は大元帥の方に向く

「テメエ・・・何したのか、わかってんのか・・・? 破壊プログラムを入れられた人間は助けられねえなんて、知ってんだろう!? あのプログラムはテメエが前線にいる時代に作られた物質だろうがっ! 危険性は十分知ってるはずだ!？」

「ちよ・・・大将! ;」

ロギギが興奮するケルルを羽交い締めにするがケルルは止まらなかった。

「命令でもなんでも・・・？　そうだ、テメエは命令できる。そういう立場にいる人間だろう。謝罪で終わるような覚悟なら最初っから元帥やってんじゃねえ！」

そう言いきり気が済んだのかロギギを剥がしそっぽ向いた

「貴様・・・」

「いいんだ。ガルル中尉。彼の言うことは事実だ。私は破壊プログラムなどを生み出さないために大元帥までになったのに、このざまだ・・・」

「御託はいい。ギロロを戻す方法はねえのか？」

「・・・あるには、ある」

大元帥の言葉で驚く、ケルルは先ほど助けられないと言った。ケルルも戻すことはできないとわかっていても、聞いた。まさか、そんな返事が返ってくるとは思っていなかった。

「本当でありますか！？」

「ああ。ただし、完全には戻せない。手助けをするだけにしかすぎない。ギロロ伍長にまだ、帰りたいと言う意思があるのなら、可能性は高い」

大元帥が言いながら、持っていた風呂敷を床に置き、結び目をとった。

中には細かな粒子が入っている注射器があった。

「んだ・・・これ？」

「破壊プログラムを投与された人間にこの中に入っている粒子を注入し、本人の意識を覚醒させるモノだ。私はこれを「覚醒プログラム」と呼んでいるが・・・」

「何で三つしかないの？」

大元帥の言葉に夏美は質問する。すると、大元帥は申し訳なさそうに

「時間がなくてね・・・発動するまでにできたのはその三本だけなんだよ」

と言った。本格的の発動まで残り最低でも四日はかかるらしい。

大元帥の指示により、奥東京市にそっくりなレプリカの町が用意され、住民もいるがすべてホログラム、ここを戦場にした。実際の奥東京市で戦闘させるわけにはいかなかったので町を作り出したのだ。

統帥の怒りと覚醒プログラム（後書き）

ロギ…いやゝ・・・大将がいきなり大元帥殴るとは思わなかった；
あ、統帥っていうのは大将のことな。正式名称はケルル統帥なんだ。
あの人

和解と理解と帰る場所（前書き）

昨日は更新できなくてすみません；昨日は映画見に行っていました；

和解と理解と帰る場所

ケロロ小隊とガルル小隊、夏美たちは日向家（仮）にいた。

「とりあえず・・・休戦？ 終わり？ 味方？ どれの考えでありますか？」

「じゃ味方のほうで」

「・・・あっさりでありますなあ・・・いいんですか？ 我輩達が憎いんでありますよ？」

ケロロの言葉にケルルは首を横に振る。

「別に・・・テメエらが憎いって訳じゃねえし憎いのはケロン軍の上層部のしかも、研究所の連中であって俺達はオリジナルのテメエらを憎いと思ったことはねえ。ただ・・・」

知っていて欲しかった。それを言える状況ではなかった。ギロロの幼馴染、兄、仲間、初恋の相手。自分達は『ギロロ』が悲しむようなことをした。記憶をなくしていたとは言え、自分達は、自分達の生きる希望となったギロロを利用したのだ。そんな我俣を言える資格なぞないと思った。

突然黙った、ケルルに不思議がるケロロだが、その後

「我輩はケルルのことが知れてよかったでありますよ？ ケルルは我輩達に自分達の存在を知られて嬉しいでしょ？」

ケロロはその言葉を笑顔で言い放った。

「・・・ば、馬鹿野郎！／＼誰がんなこと言ったんだよ！？」

「ケルルー顔真っ赤ー」

「死ねっ！／＼」

「大将、顔真っ赤ですよぉ」

「るっせえよ！＃」

「大将、素直じゃねえから」

「・・・ロギギ、減俸な」

「Σえっ!？」

ケルルの言葉でショックするロギギ。その空気に皆が笑う。する

と、ガルルが

「ケルル、ゾルルを借りてもいいだろうか？」

「あ・・・？ ああ・・・好きにしろよ。隣にいるからよ」

最初はガルルが何のことを言っているかわからなかったが、すぐに理解する。

「すまない」

「・・・そりゃこっちの台詞だ」

ケルルの言葉は聞こえなかったのか、ガルルはタルル達を伴って部屋を出る。

ガルルがタルル達を連れて、ゾルルがいる隣の部屋に向かった。

扉が開くとそこには窓の外の景色を眺めている。ゾルルはガルル達に気づいたのか視線をガルル達に向ける。

「ゾルル・・・」

「・・・すまない・・・」

『え？』

「俺は・・・裏切った・・・お前達を・・・すまない・・・」

呆然としている、ガルル達を他所にゾルルは頭を下げる。

「・・・ゾルルの・・・ゾルルの馬鹿ー！！」

トロロはそう叫ぶとゾルルに抱きついた。ゾルルは驚いて受け止められず後ろに転んでしまう

「ゾルルの馬鹿、馬鹿！ ボク、散々心配したんだからネ！ すつごく悲しかったんだからネ！」

泣き喚きながらトロロがいい、鼻が吸える音がすると思い、音源の方を見るとタルルが鼻水出しながら泣いていた

ガルル達を見ると、ガルルは若干微笑んでいて、プルルは満面の笑みである。

「さて・・・」

「・・・処罰でも・・・あるのか・・・？」

ケロン軍で裏切りは死罪になる。ゾルルは覚悟の上でケルル達宛

の手紙は書いている

「なんのことだ？ガルル小队には裏切りはない。ゾルル兵長は任務のために反ケロン軍にスパイ活動を行ったに過ぎない」

ゾルルはガルルの言葉に驚く、トロロやタルルも驚いている。

「以上だ。おかえり、ゾルル」

「・・・ただいま・・・」

ゾルルはこの日、初めて反ケロン軍の家族以外でただいまと言った。だが、それは不思議に心地よかった。

「終わった？」

「ええ」

「ケルル・・・」

ケルルが終わりを見計らって入ってきた、手の上のお盆の上には夕飯が乗っていた。

「ほら、ゾルル。何時ケロン軍が行動・・・ってテメエもケロン軍か」
微笑しながら、ケルルはゾルルの傍に行く

「俺は・・・」

「好きにしろ。反ケロン軍にテメエを引っ張ったのは俺だ。今後、テメエがケロン軍にいたいなら、そうする。それだけだ」

つまり、嫌なら除隊しても良いと言うことだった・・・だが、ゾルルはやめるつもりは毛頭ない。

「俺は・・・両方に・・・いる・・・ケロン軍は・・・仲間がいる場所・・・反ケロン軍は家族が・・・いる場所だ・・・」

ゾルルの言葉に驚いたケルルだがその後にか、と呟いた。

和解と理解と帰る場所（後書き）

ケロ.. 今回からはケルルたちも味方でありますよー！

ケル.. ハイテイションな・・・

ケロ.. ゲロゲロリヘ言ヘ

夜の会議と作戦会議

就寝し、誰も寝静まった夜中、ケロロはふと目を覚ました。眠れないと思った。隣を見るといるはずのケルルがいなかった。寝る前に一緒に寝たはずなのに

ケロロは体を起こし、ケルルを探し始めた。日向家を見渡すと、庭に出れるベランダでケルルがいた。横には酒瓶があった。

「ケルルー」

「あ・・・？ なんだよ、起きたのか・・・」

「なんか、目が覚めたであります・・・我輩にもちょーだい」

「ああ？ 酔うだろうがテメエは」

「大丈夫ー」

ケロロはそういうと、酒を注いだ。本人自身もそんなに飲むつもりはない

「ケルルって、酒が強い方？」

「酔った試しがねえな・・・反ケロン軍の連中と何度か宴をするんだが、酔ったことはねえな」

「それってワクじゃん・・・クルルといい勝負になりそうですありますなー・・・ロギギは？」

「あ？ あいつか？ あいつはそこそこ飲むかな、ガルル中尉のDNAも持っているわけだし」

「え？ ロギギってギロロのクローンじゃ？」

「ああ。そういう目的で最初は作ろうとしていたらしいが、ガルルのクローンもできないか・・・ということになってな。一緒に入れたんだよ。だから、俺達はテメエらの記憶が途中まである」

「・・・あれも？」

「ああ。ゾルルも持っているし、ルククもある」

ケロロがアレと指したのはギロロが二つ名を手入れた戦場でのこ

とだ

「そうでありますか・・ログギは？その事件のこと知ってんの？」

「いや、あいつも知らねえな」

「そっかー・・・」

ケロロは安堵したように息を吐く。あれは封印されるべきモノだ

「話かなり変わるけど、ケルルはなんで、起きてんの？」

「ホントに今更だな・・・；目が冴えてな、つうか傷が痛くて寝てられねえ・・・；」

「あはは；」

ケルルの脇腹の銃創の傷。あの時は応急処置だけをしたが、反ケロン軍の部下に指示出した後、倒れた。原因は疲労と出血だった。

「で、酒瓶出して飲んだ。そういえば・・お前夢覚えているか？」

「ゲロ？ああ・・覚えてるであります。」

「「何かが落ちた水の音、それがすべての始まりだった・・」」

「あれってどう意味だ・・？」

「さあ・・・？何かが始まったてことはまさか、今回のことじゃないでしょ？流石に」

「・・・俺達が見つけた時、ギロロは川岸にいた。ずぶ濡れの状態でな・・勘だがテメエが言っていることで当たってるだろうな」

ケルルが言うには、ギロロを見つけたのはログギとタナナだった。反ケロン軍本部の近くには、川があり、その岸で傷だらけに倒れていたらしい。本部に連れて帰り、手当てをして、覚醒したが、記憶がなくなっていた。

「ってな感じだ」

「そうでありますか・・まあその時点から破壊プログラムがギロロの中にあっただけでありますうなー・・・」

「ああ。時期を見計らって発動させたのか、もしくは時間で発動するのか・・どれかだな」

後、二日。二日でギロロは破壊プログラムに飲み込まれる。二日なんてあつと言う間だ。

翌日、作戦会議が行われた。大元帥の情報により、奥東京市に攻め込んでくるのは間違いないらしい。

「問題はこの粒子を誰がギロロに注射するかでありますな・・・」

「一応、ケロロ・日向夏美・ガルルでいいだろう」

ケロロの言葉でケルルはあっさり言い切る。

「あ、あたしっ!?! なんでっ?」

「破壊プログラムは完全に消えねえだろう、粒子を注入しても戻らない。説得の必要もある。ケロロは幼馴染、ガルルは実兄、日向夏美は・・・」

ケルルの言葉はそこで終わる。流石にギロロの初恋の相手、とは言えない。

「ギロロと一番関わりがあるペコポン人だからだ」

ケルルの言葉でケロロ達が苦笑しているが夏美はわかっていない。

「よく、あの一瞬で言い訳を考えたでありますな・・・」

「まあな」

ケロロの言葉でケルルがしれっと返す。

「粒子も入れ、説得も行い。ギロロを戻す、ギロロと深い関わりがある人物が適任ということだな。」

「だったら、ドロロでもいいじゃないの? ボケガエルと一緒に幼馴染だし・・・」

「ドロロは今回ゾルルと一緒にギロロを捉える役目を任している、アサシンは二人しかいねえからな。テメエは戦闘はさしてやっていねえだろうから、ギロロの攻撃は回避しろ。スピードでギロロに回り込めればいい」

「簡単に言うでありますな・・・」

ケルルが言っていることをケロロが突っ込みをいれた。

ケルルとてわかっている、ギロロが破壊プログラムで飲み込まれたらあの時のように暴走状態になることは理解している。だが、今回はそうも言ってられないのだ。

「まあ我輩達の誰かが入れたらいいでありますから、夏美殿も固くならないで」

「わ、わかってるわよっ!」

本番は明日失敗など許されないことだ。しかも、今回はギロロの命がかかっている。

夜の会議と作戦会議（後書き）

後一話、更新します

不安と夢の導（前書き）

特殊体験はしやすい冬樹くんにしてもらいました。

不安と夢の導

「ねえ・・軍曹」

「ゲロ？」

作戦会議の後、他の皆が解散してケロロと冬樹、ケルルがその場に残っていた。

「伍長・・大丈夫かな・・？」

冬樹は不安そうに呟く。

「・・大丈夫であ「どうだろうな」ゲロ？ケルル？」

ケロロの台詞を遮りケルルが告げる。ケロロはケルルに視線を向ける

「わからねえぜ・・前に俺の前任統帥だが、統帥は昔ケロン軍に所属していたが、その時に破壊プログラムが作成された。統帥の戦友が投与された・・まず、破壊プログラムの意思が行うのは・・投与された人間の精神破壊だ・・完全に覚醒するということはそういう意味もある・・」

「ちょ・・ちょっとちょっと！ケルル！何怖いこと言ってるの！？最初から不安になること言わないで欲しいでありますよー！」

「悪い悪い・・じゃ、俺も寝る」

「おやすみ・・」

「お休みでありますー冬樹殿も」

ケルルとケロロは自分の部屋に戻って行った。冬樹も自分の部屋に戻り眠る。

その夜、冬樹は不思議な夢を見た。瓦礫とすべての何かの残骸だけで形成されている世界にいつの間にかポツンと立っていた。

「夢かな？」

入って早々冬樹は理解した。しばらく、歩いてみた。すると、目の前にギロロがいた。

「伍長？・・・僕の願いが夢になって出てきたのかな？」

冬樹の願いはギロロが元に戻るようにと願った。それが夢で現れたのかと思った。だが、その刹那ギロロがゆっくりと冬樹の方に視線を向ける。

その目には光が宿っていなかった・・・

「伍長・・・？」

「ごちよう・・・？何、それ・・・」

ふいにギロロの手が瓦礫の一部に触れたかと思うとその瓦礫は崩れた。するとギロロは冬樹と反対側にフラフラと歩いていく。

「伍長！待ってよ！伍長！ごちよ・・・！」

そこで景色はすべて真っ白になった。

冬樹は自室のベッドで目を覚ました。冷や汗が止まらない。時計を見ると、朝の5時半だった。

下に行くと、ケルルとサラがいた。

「おはよう。朝早いね・・・」

「おはよう。冬樹こそ・・・早いな。」

「よお。おはよーさん。まだ、寝てても大丈夫だぞ？」

「ううん。なんか目が覚めちゃって・・・」

「・・・そうか」

冬樹の顔に陰りがあったのをケルルは見逃さなかった。ケルルは台所で何か作業したかと思うと、冬樹の前にミルクティーを出した。サラにも出してやる。

「え・・・？」

「なんつー顔してやがる、戦場からようやく帰って来た・・・みたいな」

「そんなに・・・変な顔してる？」

「うん。俺もお兄様と同意見かな」

やはり、あの夢のせいだろうか冬樹の脳裏に掠める。ケルルに

言えば不安になるだろう冬樹は誰にも言わないことにした。

徐々に他の皆が起き出した。とてもギロロがあんな状況でこれから戦場に行くとは思えない。朝食を済ませた後、すぐにケロン軍が行動を起こした。

『隊長！先輩が現れたぜ！』

『奥東京市を破壊中だヨ！』

「行くぞ」

ケルルの言葉で全員が武装する。冬樹はクルルたちと一緒に日向家に待機だ。

「ケロロ。号令を」

「ゲロっ！？我輩っすか！？ケルルやガルル中尉の方が・・・」

「阿呆。ギロロの上司はテメエだろうが」

「（納得できるようなできないような・・・）えー・・・これより我輩達はギロロを取り戻すでありますっ！行くでありますよ！」

『了解！』

今ココに、最終決戦の幕があがった。

不安と夢の導（後書き）

クル.. 管理人の執筆はオオズメに入ってるぜえ
トロ.. もう少ししたら、完結かな？
ルク.. ま、気長に待っててくれや

投与と浅葱と暗黒世界（前書き）

今日は一話だけです；

投与と浅葱と暗黒世界

真っ暗な世界。そこにギロロは一人立っていた。別に何をするわけでもなく、ただそこに立っているだけだ。何の感情も記憶も言葉も何もない。無意味にそこにいるだけだった。

『お前はまた、傷ついてどうするんだ。仲間もいるのに』

声が響いた。ギロロが首だけ動かすと、浅黄色、瞳が水色のケロン人がいた。

『まだ、私のことは知らなくていいさ』

暗い世界の中ギロロと浅黄色のケロン人がいた。

ギロロの体を使い破壊の限りを尽くしている破壊プログラムの前にケロロがケロボールを持ちながら立っていた。その横にはケルルもあり、ケロボールとよく似たボールを持っている

「まさか・・・こんな形でギロロと喧嘩するはめになるとは思わなかったであります・・・」

「? 喧嘩?」

ケロロの言葉でケルルが首を傾げるがドロロが後方で苦笑しており、ケロロはなんでもないと言った。

破壊プログラムはこちらと敵と認めたのか突撃してきた。

「まずは、僕達が相手ですう!」

「隊長、ごめんですよぉ!」

「行くッスよ!」

その相手をしたのは突撃兵組だった。注射をする隙を造ればいいのだ。

突撃兵組が破壊プログラムに向かっていく。ギロロの体を使い、プログラムはタママたちをかわしていく。

だが、体の方に異変が出た。

「攻撃が・・・当たっていないのに・・・傷ができて・・・」

ゾルルの言うとおりで、ギロロの体には裂傷がいくつも出来てきている

「どういふことですか!？」

『おそろく、破壊プログラムのせいだろうな、生身でプログラム＆ナノマシンまでも使ってた。負担が出ているんだろう。隊長、早めにしねえと先輩の体が持たねえぜ』

「何!？」

「何ですと!？」

ケルルとケロロの驚愕な声上がる。

「じゃ・・・! やばいじゃないッスか!」

「突撃兵組! 隊長を取り押えるぞ!」

ロギギの号令で三人が動き出す。ドロロとゾルルも動き出した。タママとタナナが体を押さえつけるが破壊プログラムはそれを吹き飛ばした。ゾルルとドロロは峰打ちをしたが効果はあまりなかった。

ケロロ達も見ているだけではない。ケルルは体を抑えるが、左腕で攻撃される前に離してしまう。ガルルは麻酔銃で破壊プログラムに撃つが効果がないのか効いていない。

劣勢だった。だが、チャンスが出来た。体にガタが出たのか、破壊プログラムが膝を突いた。通信機からクルルとルククの声がした
『今だ!』

その合図でケロロ・夏美・ガルルが動き出した。注射器を取り出してギロロの体に刺し粒子を入れる。破壊プログラムは奇声を上げ、見境なく暴れまわった。

「ギロロ! 戻ってくるであります! お前はそんなプログラムでやられる、男じゃないであります!？」

「ギロロ。お前は私に言ったことがある。自分は殺すために軍人になっただけじゃないとね」

「ギロロ・・・さっさと戻って来なさいよ!」

ケロロたちがそれぞれ言う、ケルル達も言っていたが・・・
ードゴン！ー

「ゲロッ？なんの音でありますか！？」

「何かが落ちた音ですね・・・」

落ちた場所からは濛々煙が出ている。その瞬間、黒い鳶が伸びてきてケロロと夏美を絡め取った

「えっ？」

「ゲロー！？」

「ケロロ！？日向夏美！」

そのまま、煙が上がっているところまで引っ張られた。しばらくすると、煙は晴れ黒い高い塔ができていた。

「ケロロ軍曹たちは・・・」

「軍曹さん！」

「おそらく・・・あんなだろうな・・・ったく、厄介なことに・・・！」

「プルル看護長とタルル上等兵はあの塔に向かい、ケロロ軍曹達の救出を！」

「「了解！」」

ガルルの指示で二人はあの塔に向かっていく。

ギロロは浅黄色のケロン人とまだ、真っ暗闇の世界に居た。

『ああ・・・ほらほら、お前の仲間が呼びかけているぞ。まだ、気づかないのか？』

彼女は外の様子がわかるのか、ギロロにそう語るがギロロは何もわからないようで首だけを動かしている。左右を眺めて、座り込む。先ほどからずっとこの様子で彼女も溜息が出た。

『ギロロ。怖がるな。思い出せ。お前が軍人を目指したのを思い出すんだ。』

彼女の言葉を聞いてもギロロは何も感じなかった。

何もわからない、何も知らない。自分が誰なのかもわからなかった。

た。

日向家でギロロの様子を見ている冬樹は気づいた
「あ・・・」

届く言の葉と取り戻す光（前書き）

二日ぶりです；すみません；少しごたごたしていたのもので；

届く言の葉と取り戻す光

「?どうしたあ?」

「わかった・・・! 伍長が自我を、自我を取り戻せない訳を・・・!」
冬樹はそういうとクルルたちの静止を聞かずに走り出した。クルルもルククたちにその後を任して、自分も行く。

ケルル達が説得してもギロロは戻ってこなかった。

「ギロロ・・・! ケロロくんや夏美くんまで危険にさらして・・・
それがお前の望みなのか! ?」

「まあ・・・あいつの意思じゃねえからな・・・所詮プログラムの意思だ。プログラムに意思があるかどうかは知らねえが」

「暢気に言ってる場合かよ、大将;」

「るせえ」

ガルルの言葉にケルルがツツコミをいれ、ケルルの言葉にロギギがツツコミをいれた。

そのとき

「伍長!」

冬樹がやってきた。

「冬樹! ?」

「冬樹くん! ?」

「フツキー! ?」

皆が驚愕の声をあげる。だが、冬樹は構わずギロロに近づこうとするが・・・

「止せ。今あそこに行けば、怪我をするのは間違いねえ」

ケルルが止めた。冬樹はそこから声をあげた

「伍長・・・君は・・・自分が誰なのか・・・わからないんだね」

「え・・・？」

冬樹の言葉でその場にいた、全員が瞠目した

「どういうことだよ・・・？」

「モニターで見ていると、表現仕方がわからなくて泣いたりしてる赤ちゃんみたいだ・・・まるで自分がわからないみたいだな・・・」

冬樹は言いながら、ギロロに近づき膝をつく。

「君の名前はギロロ、ギロロって言うんだ」

『んでもって！我輩の大親友で部下で我が隊の副官であります！』

「軍曹！？」

全員の通信機からケロロの声がした。

「ケロロ、大丈夫なのか？」

『とりあえず、息はできるから大丈夫でありますよっ！ハイハイ！ギロロのことならなんでも言える自信はあるっ！』

「くっくくっ俺だってあるね」

「私だってありますよ」

「テメェら・・・張り合うなよ；」

若干暴走している三人にケルルのツツコミが入る。冬樹やタママたちは苦笑しているが

「伍長さんは厳しいけど優しいし・・・」

「放っておけっていう癖に、自分は率先して救出しようとしたり」

『ちよっと！タママとドロロ！我輩より先に言わないでよ！ギロロは頭固い・・・けど！時々は笑って許してくれたりする、変な優しさもあるし！』

タママとドロロ、ケロロがそれぞれ言う

「先輩はクソ真面目で犬猿の仲でも容赦なくずかずか入ってくるよなあ・・・」

『ギロロはね！焼き芋も上手だしね！』

「あ、後、飯もうめえよな」

『嘘！？ギロロ、下手糞よ！？』

「大将が料理教えたんだよ」

ケルルの言葉をロギギが補足する。

『君は伍長・君は・自分が誰なのか・わからないんだね』
外からそんな声がした。

『ほら、お前を知る人間は沢山居るぞ。外の声を拾ってやろう・』
彼女がそういうと外からの声が聞こえた。

『君の名前はギロロ、ギロロって言うんだ』

『んでもって！我輩の大親友で部下で我が隊の副官であります！』

『とりあえず、息はできるから大丈夫でありますよっ！ハイハイ！
ギロロのことならなんでも言える自信はあるっ！』

『伍長さんは厳しいけど優しいし・』

『放っておけていう癖に、自分は率先して救出しようとしたり』

『ちよっと！タママとドロロ！我輩より先に言わないでよ！ギロロ
は頭固い・けど！時々は笑って許してくれたりする、変な優しさ
もあるし！』

『先輩はクソ真面目で犬猿の仲でも容赦なくずかずか入ってくるよ
なあ・』

『ギロロはね！焼き芋も上手だしね！』

『あ、後、飯もうめえよな』

『嘘！？ギロロ、下手糞よ！？』

『大将が料理教えたんだよ』

『どんどん聞こえる。無関心だったギロロに変化が出てきた・』
「ケ・・・ロロ・・？」

『そうそう。君にはケロロくんと言うすばらしい上司兼友。そのク
ローンのケルル君、性格に難はあるけど、可愛い後輩のタママ君に
そのクローンのタナナ君。兄で君の目標のガルル准尉、そのクロー
ンのロギギくんに。ひねくれ後輩のクルル少佐に、そのクローンの
ルククくん。君の親友のドロロ兵長にそのクローンのゾルルクん・
・ペコポン人の方々がいるだろう？君は一人ではないんだよ』

「みんな・な・」

彼女の言葉で段々ギロロの瞳に光が戻ってきた。

「俺は・・・」

『ほらほら、早く行ってあげな。ケロロ君たちが飲み込まれてしま
うよ。あれは危険すぎる・・・君でしか助けられないモノだ』

彼女がギロロの背を押した。

「貴様は・・・いったい・・・」

『私のことはまだ、だ』

彼女は人差し指を口に当ててシートと言った。ギロロの記憶はそ
こで途切れた。

戦場の赤い悪魔覚醒。

外ではギロロの様子がおかしくなっていた。唸ったと思ったら倒れたのだ。

「ギロロ！」

「伍長さんっ!？」

ケルルをはじめ、皆が倒れたギロロの元に行く。

「ギロロっ!ギロロ!しっかりしろっ!」

ケルルが抱き起こし頬を叩いたりしているが気づく気配はない。

「大丈夫でしょう。気絶しているだけです」

「いったい、どうしてですかねえ？」

『さあ?;』

「破壊プログラムを看破したのかな？」

「それならいいんだがな」

「違ったら最悪だけど;今この状況はさ」

ロギギの言うとおりで今ギロロの周りには今回の関わる人物がほとんどいる。破壊プログラムが解除されていなければ、一網打尽の状況である。

そのとき、通信が入った。ガルルの通信機だった。

「どうした？」

『大変ッス!この黒い塔、入れないッス!』

「なんだと!?!何故だ...!」

『何か・固い物で覆われているわ、タルルくんの技でもびくともしないもの...』

「タルルの技でも...?」

プルルの言葉にタママは不思議に思う、タルルの技のすごさは知っている。だから、それ故不安にもなる。

「わかった。私もそちらに向かう」

「・・・っ・・・」

「ギロロッ」

ケルルの安堵した声がした。ギロロが目を覚ましたのだ

「ケ・・・ルル・・・?」

「大丈夫か・・・?」

「ああ・・・」

「伍長さん・・・」

タママが不安そうに呟く。そうギロロは記憶喪失だった、それが今にも継続されているかはわからない。

「・・・タママ・・・か・・・?・・・タママだな・・・」

ギロロが確かめるかのように微笑を交えながら呟く

「伍長さん！記憶が・・・！」

「ああ・・・戻った・・・」

「良かったですっ！」

この言葉でタママはギロロに抱きつく。ギロロも瞠目したが頭をなで受け入れていた。

「クルル殿、タママ殿は子供でござる」

「わーってる・・・」

その現状が面白くないクルルはドロロに嗜まれ、隣に居たケルルの苦笑を受けていた。

「ケロロたちは・・・?」

「その前にギロロ、本当に体が大丈夫なのか?」

「え・・・?大丈夫だろう・・・っ」

ガルルの言葉でギロロは立ち上がろうとしたが、すぐにふら付きタママに支えられる。

「大丈夫じゃねえだろう・・・」

「大丈夫だ・・・ケロロたちを飲み込んだあの塔は・・・閉じ込める役割だけがある・・・」

「なーんで、知ってるかなあ・・・今まで意識がなかった奴が・・・って、待て待て！飛行ユニット出してどこ行く気だ!?!」

「勿論塔にだ」

ギロロの言葉にケルルは若干遠い目をした、この状況でギロロを止めろと言う方が無理な話で、ケルルもそうだがここにいる全員はギロロに甘い・・・；

「あー・・・なんか、自分で思っただけで虚しくなった・・・；」

「？大将？；どうした？」

なんか、沈んだケルルを心配そうに見るロギギ。その間もギロロは行く準備をしており、ガルル達に止められていた。

戦場の赤い悪魔覚醒。(後書き)

ギロ..ようやく、俺としての登場なんだが・・・；

ロギ..あはは；そうだな。隊長は「ギンロ」としてずっと登場して
たし；

ケル..冷や冷やの連続だなこの小説；

黒き塔（前書き）

今回は久しぶりの挿絵つきです
W

黒き塔

「わーった・・ギロロ。行きたいんだろ？なら行くぞ、俺も一緒にな」

「いいのか!？」

「但し、あまり無茶はしないことだ」

ケルルの言葉でギロロはコクコクと首を縦に振った

「(つとか言ってるが・・無茶するんだよなーこいつは・・・;)」
ギロロの行動パターンが丸分かりなケルルであった。

「隊長―ここッスー!」

結局全員で行くことになりタルルたちと合流した。

「ここから固くて入れないッスよ・・」

ガルルが確かめてみたら事実でガルル達でも入れなかった。だが、ギロロがやると・・

―ニユ・・―

>i22588―2948<

そんな効果音が付きそうな感じで塔にギロロの手が入った。

「入れたぞ・・・;」

「でも・・オイラ達は指一本も入りませんけど・・・;」

『キキキッ多分これ。中にいる二人が原因だろうなあ』

「どういうことだ?」

ルククの言葉にケルルが疑問を持つ

『中で二人は隊長のことを気に掛けて飲み込まれた通信途絶える前ではケロロ軍曹と日向夏美は隊長説得してたしなあ』

「なるほどな・・今回は精神関連ばっかの事件だな・・」

ケルルが納得(&呆れ)ながら言った言葉に他の皆が頷く

「俺が行けばいいな?」

「ギロロ、本当に無茶だけはするな」

「わかつている」

ガルルの言葉を即答で返して、ギロロは腰に縄を（ケルル提案）して、中に入って行った。

ギロロが入ったとき肌寒さを感じた。自分がさっきまで居た、あの暗黒世界にいるような錯覚がある。また、あの世界時のような沈んだ気分になるがそれを振り切り、ケロロ達を探す。

しばらく、すると見つかった。ケロロと夏美がふわふわと浮いていた、途中までは通信していたんだろうと思われる。通信機がケロロの近くで浮いているからだ

「ケロロ・・・夏美・・・！」

ギロロは二人の名を呼ぶ、申し訳なさ一杯で

「二人共・・・起きろ・・・ここにいたらダメだ・・・！死ぬぞ・・・！」

ギロロは直感と共に確信があった。ここにいればいつかは死に絶える、ここはそういう世界なのだ。ひどく、体がダルく感じるのはここ特有なのだろう。対象を幽閉し生きる気力を奪い、そして、死なすのがこの塔の作られた意味だ。

そこまで二人の名を叫びながら、思考をめぐらせていたギロロはふと気づく。何故自分はそんなことを知っているのだろうか。夢——自分のあの世界で聞いたのは自分でしか助けられないこと云々だった。

「ケロロ、夏美・・・起きろ・・・！ああ、まったく・・・！」

ギロロはしばらく考え、ある方法を思いついた

「がんだむの限定版と623のスペシャル放送があるぞ・・・；」

「「嘘！？どこ！？」」

ギロロの台詞で見事に起床した二人。ちなみにケロロのは以前買えなかったと言って泣き喚いていたのを、夏美はケロロの侵略活動のために聞けなかったスペシャルラジオ放送を嘆いていたのをギロロはバッチリ覚えていた。だが、ラジオのことは自分で言ってい

ついた。

「起きたか・・・」

「あれ・・・ギロロ？あれ？ここ・・・」

「ケルル達曰く塔に吸い込まれたんだろう？」

「ああ、そうだった・・・って！ギロロっ？大丈夫なんぞ？治ったの！？」

「本当！？」

「落ち着かんか；貴様らは。正真正銘のギロロだ」

「しかも、記憶が戻ってるー！！」

ケロロは感激のあまり、ギロロに抱きついた。ギロロはされながら、先程はタママにされたなと思っていた。夏美も涙ぐんでいた。

「喜ぶのはまだ、早いここから出るぞ」

「ゲロ？なんか・・・すっげー・・・体力がなくなってる気が・・・」

「なんか、ダルいわね・・・」

「それがこの塔だ。捕まれ。出るから・・・」

「ギロロは大丈夫なんぞ？」

「大丈夫じゃなきゃ来れておらん」

「「確かに・・・」」

二人はギロロに捕まり、ギロロは飛行ユニットを展開する。そして、そのまま飛び立つ。

黒き塔（後書き）

あともうちょい！
W

気づかれた矛盾（前書き）

次かその次の話で終わると思います
W

気づかれた矛盾

その頃外では、ガルルとクルルがそわそわし、行ったり来たりを繰り返していた

「テメェら・・・取りあえず、落ち着け。さっきからうぜえからよ」

「何を言う！？ギロロが心配ではないか！」

「待て、ケロロと日向夏美は心配じゃねえってか・・・弟の前でよく言うな；」

「彼らはまだ、体力があるだろう！」

「日向夏美はあの戦闘力以外じゃ一般人だっつうの！#」

クルルは無言だが、行ったり来たりをやはり繰り返していた。その最中でもケルルとガルルの言い合いが聞こえる。

「なんか・・・あそこだけ聞いていると、今が大変な状況ってことを忘れそうになるよ；」

「同感だ；大将とガルル、落ち着けて；」

冬樹の言葉に同意する。ロギギは二人に注意したがスルーされた。

「スルーって悲しいんだけど；」

「いつもですよ；」

「だ・・・な・・・」

「お前らひでえよ；」

ロギギが仲間に精神を蹴り落とされている最中でも二人の言い合いが止まらなかった。

そんな中、行ったり来たりを繰り返していたクルルの足が止まる。

「クルル？どうしたの？」

異変に気づいたのか冬樹が声をかけた。すると、クルルはケルル達の方に向かい、言い合っている二人の下へ。

全員が疑問に思っていると、クルルは二人に話しかけた。

「今回のこと・・・矛盾がありすぎると思わねえ？」

『(は／え／はい)?』

クルルの開口一番はここにいる全員を呆氣に取らすには十分な威力を持つモノだった。

「え・・・と、何が・・・?」

「だから、今回の事件だよ。最初っから」

「何言ってるんです?」

一番最初に回復したケルルが聞き、ガルルは事情を尋ねる。

「ケルル、あんたは察し付いてるんだろ? 今回の事件の矛盾さを・

」

クルルはケルルと向き合いながら、独特の笑い方をし言い放つ。

全員がケルルに視線を向ける

「はぁ・・・気にしないようにしてたのに;」

「じゃ、大将は今回の事件で何かあると思った訳?」

ロギギの言葉と、周りの視線により、ケルルは渋々口を開く

「ギロロが見つかったのは、反ケロン軍付近の川岸だ。それは間違いないね・・・」

その言葉でロギギとタナナが頷く、何せそのギロロを見つけたのはこの二人だ。

「さて、こっからが矛盾だ。確かにケロン軍付近の川岸と反ケロン軍付近の川岸は同じで繋がっている」

「はい、大将。そのどこが矛盾?;」

「まあ話を聞け。何故、ギロロは流れてきたんだ?」

「は? ケロン軍の川にある崖から落ちて、それで流れてきたんじゃないん」

ロギギの言葉で反ケロン軍の皆は頷く。

「阿呆。よく考えろ。ケロン軍はギロロを完全なる生物兵器化にしようとしていた・・・にも関わらず、みすみす逃し、反勢力組織でもある反ケロン軍に繋がる川にみすみす流した・・・できすぎには出来すぎている。それに発見された時、傷だらけだった・・・それは川の中の石とかじゃなく、明らかな人工的なモノ・・・明らかに、ギロ

ロの自分だけの力では崖まで、逃げ・川に落ちることはできないし、何よりあのギロロだ。その状態で間違えれば死ぬ確率が高い真似をしようとする行為はやるとは思わねえ」

ケルルの説明でそれもそうだと思う。尚、ケルルは続ける。

「だったら、ギロロは誰かの手を借り、ケロン軍を脱出し、追い詰められたから、川に飛び込んだってところだな・」

さあ矛盾を明かそう。誰が一体何故ギロロを助けたか・？

「ギロロが帰還したことは誰も知らない。ガルルですら知らなかった事実だ。もし、そいつが上層部にいるとしたら、これは連中にとっては裏切りを意味する行為・・じゃ、違う場合は？」

「伍長を・・あえて、ケルル達と会わせたってこと・・？」

「正解。おそらく、破壊プログラムの発動条件は・・15人のケロン人。ケロロ小隊・ガルル小隊・」

「俺・達か・」

「ああ。そして、ギロロ本人だろうな。それが集まった時発動される・」

矛盾——というよりは、謎がかなり残っているのだ。

さらにケルルが口を開こうとすると・

「ゲローー!!!」

「のわあっ!？」

「ちょ・!死ぬかと思った・!」

塔からゴロゴロと出てきたのはケロロと夏美、それを救出しに行った。ギロロだった

「お前ら・!」

「姉ちゃん!」

「軍曹さあん!」

それぞれが、三人に駆け寄る。

「大丈夫か?三人」

ケルルは三人に近づきながら言う。三人はダルそうになっているが意外に元気だった。

「あの塔・・・どうするんですかあ？このままってことにはできませんよねえ・・・」

「幽閉対象がいなくなれば・・・自然と崩壊する・・・はず」

「先輩・・・その情報どっからのだよ；」

「そんなの・・・俺が・・・知り・・・たい・・・」

ギロロはそういうとその場で倒れた。ギロロは意識を失う寸前に、仲間の声が聞こえた気がした。

気づかれた矛盾（後書き）

ケロロ..長かったでありますなー..

ケルル..おいおい、まだ終わってねえぞ、もう今日で最終話まで更新予定だ

ギロロ..もうお別れか..

ケロロ..でありますな

終結と昔の約束（前書き）

クライマックス話です W W

終結と昔の約束

ギロロがプルルの診断で熱を出しているだけだとわかった、ケロロと夏美が次に倒れた。症状はギロロと同じ。

「多分、この黒い塔に入ったせいだな」

そして、ふいに、ケルルが塔を見上げると、塔は上から崩れていた。

気が付けば破壊プログラムが破壊しただけの偽奥東京市があった。

「・・・終わり・・・？」

「だな・・・とりあえず、終結ってとこだ」

冬樹が呆然と呟いた言葉にケルルが言う。

「これから我々は大変だ」

「くっくくく、がんばれよお？今回はケロン軍の恥として後世まで語られるな（笑）」

「元はと言えば、貴様らが軍を襲撃したのがそもそもの・・・！」

「おいおい；俺達組織はケロン軍より数はいねえんだぜ？そんな組織に抑えられたのはどこの軍だろうなー♪」

ガルルの言葉でケルルが挑発する。他の皆は呆れてその光景を見守っている。

「で・・・ケルル達はどうするの？」

「あ？何が？」

「これからだよ」

「あー・・・ギロロが目を覚ますまではいるさ・・・その後は・・・そんな時に考える。」

冬樹はケルルらしい言葉に笑みがこぼれた。そこから、大元帥がやってきて、病院を手配してくれたが、家でも十分療養できるので、三人とも家での療養になった。他のメンバーも怪我と言う怪我もなかった。ケロロと夏美は二日後に目を覚ました。その際滅茶苦茶秋

に叱られた。だが、その後抱きしまられ日向姉弟は母の腕の中で泣いた。

「いやー・・・あん時ギロロが来なきゃ死んでるところでありますなー」

「まったくだ。周りに気をつけろよな；」

「ゲロゲロ（笑）早くギロロ、目え覚まさないかなー」

事件が終結して、一週間・ケロロ達や真実を知ったケロン軍では今回のことを

『破壊プログラム事件』またわ『反ケロン軍襲撃事件』と呼ばれている。主に軍では後者が普通の兵士に前者は上層部の間でそう呼ばれている。

その後反ケロン軍とケロン軍は同盟を結んだが、ギロロにまたこんなことをすれば容赦なく刃向かうと言っておいた。

「ケルルは・・・いや、なんでもないであります」

「あ？気になるだろうが」

「なんでもないでありますよっ！我輩ギロロのどこに行って来るでありますっ！」

ケルルはそんなケロロの背を無言で見送った。

ギロロの病室にはクルルとドロロがいた。

「珍しい組み合わせでありますなー・・・」

「そうでござるか？」

「うん」

ケロロは素直に頷いてドロロの隣の椅子に腰掛ける。

ギロロは今は夢の中ではまともな姿ではなくモヤモヤとした感じの姿だった。

『ここ・・・どこだ・・・？』

ギロロは周りを見渡す、病室に似ており、実際に病室だった。目の前の病室のプレートには自分が知っている名が掲げられていた。

『マジョー!』

幼き自分が病室に入って行った。

『昔の記憶なのか・・・?;』

ギロロは何故昔の記憶を見ているのだと思いながら、病室に入って行った。

『ギーくん・・・約束だよ?』

『ああっ!約束だ!』

見たものは懐かしい約束だった。そこでギロロは何かにつ張られた。

ケロロ達が他愛のない話をしているとギロロがみじろきをした

「ん・・・?」

「ギロロっ!」

「ケ・・・ロロ・・・?ここは・・・?」

「日向家の地価秘密基地だぜえ」

「そうか・・・ずっと居たのか?」

ギロロは体を起こしながら尋ねる

「ギロロくんまだ・・・!まあ一時間ぐらいは三人でいたよ・・・?」

「そうか・・・ありがとう」

>i22652—2948<

ギロロが笑顔でお礼を言った。三人は顔が真っ赤になる。だが、そんな空気も終わった

終結と昔の約束（後書き）

ガル..次で最終回だな

ゾル..そう...だな...

タル..とうとうツスね...

プル..そうね。私はさして出番なかったけど

三人...。

最終話 宴（前書き）

最終話だけ最終話って付けさせてもらいました^^

最終話 宴

「ギロロー！目を・・・！目を覚ましたか！」

「Σガルル！？どうしたっ？；」

ギロロは急いで来たガルルに驚く。その後からぞろぞろとやってきた。

「伍長さんよかったです」

「何日ぐらい寝てたんだ？」

「一週間。寝てたぜお前」

「いっ・・・！；」

ケルルの言葉で絶句するギロロ。その後プルルの診断により、怪我以外は支障はないといわれ、ケロロが言い出した

「宴であります！」

「普通やるか・・・？；」

日向家リビングでデカデカと《ギロロ快気祝い&事件終結祝い》と書かれた看板があった。ギロロはお酒を飲めないのでボーとしていると、上から酒をかけられた。

「な・・・」

「くっくっく。これぐらいの罰ゲームは序の口だろう？」

「罰ゲームって・・・；」

そして、またもや、何かかけられた。舐めてみるとコーラだった。見上げるとタママがいた。

「心配したんですからねえ！すっごく不安にもなりましたし、これぐらいやつても罰はあたらないと思いますっ！」

タママの言葉にギロロが苦笑していると逆側から何かかけられた。水だった。そちらを見るとドロロがいた。

「まったく、皆心配したんだからね」

「・・・すまん」

本気で申し訳ない気持ちになるギロロ

「ギロロー！こっち来るでありますっ！」

「わっ馬鹿お前酔ってるだろっ俺は下戸だと知っているだろうが！」

」

もうすでに臭いだけでも酔いかけているギロロであった。

「さて、それでは皆さん事件終結&ギロロ快気祝いで・・」

『乾杯！』

「するの・・遅すぎないか・・?;」

ギロロのツツコミは虚しく聞き届かなく、皆ドンチャンとしていた。そんな光景を見てギロロは戻ってきてよかったと思う。

今回の物語はこれでおしまい・・戦場の赤い悪魔は平和な世界に戻って来れましたとさ・・

「しかし・・あの浅葱色のケロン人はいったい・・?;」

本当のおしまい！

最終話 宴（後書き）

ようやく終わりました・・長かった；
ここまで愛読（してる人があるか怪しい）していただきありがとうございます！
ございました！

次回の予告？（前書き）

それっぽいのをしておく。でも書くかは不明です！

次回の予告？

「ギロロ・・・？」

「すまん・・・ケロロ・・・！」

すべての始まりは昔の約束・・・

「マスターに手え出す奴は許さねえ・・・」

「ギーくん・・・ようやく一緒にいられるね」

魔女——

キルミラン——

自分の意思——

そして、自分の居場所——

「ケロロさんたちに手を出すというのなら、君を・・・殺すよ・・・
バイル」

「上等。テメエはいつも俺の＜居場所＞を奪っていくな！ティオラ
！」

人造人間

それぞれの意思を貫いてみせろ

「ギロロ・・・帰ってくるであります・・・！」

「ギロロくん・・・！」

仲間の叫び

「よせ・・・！俺の名を呼ぶな・・・！やめてくれ・・・！」

赤い悪魔は心の傷を隠すように叫ぶ。

『ギロロ・・・君を壊したくない』

浅葱色のケロン人――

「ギーくん・・・逃げてね。いつか――」

「マジョジョ――！」

次回の予告? (後書き)

妄想乙ですw! 予告絵←

http://www.pixiv.net/member|illustrations?id=18381909

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3240s/>

劇場版ケロロ軍曹 反ケロン軍来襲！～今明かされる闇の歴史～

2011年5月2日14時12分発行